
冒険者の心得その1生きるべし！

三歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冒険者の心得その1生きるべし！

【著者名】

ZZマーク

【作者略】

三歩

【あらすじ】

ケインとラルゴ、神様から”アビリティ”と呼ばれる特殊な力を授かったことで、冒険者として生きていく道をえらんだ2人の少年達の友情物語。2人の行く手には多くの困難とツツコミニ要素が待ち受けています。

悩みながらも前を向き、自分の限界を決めてしまわないで突き進む少年を描いた冒険劇を目指します。

初投稿です。1話」と短めに書いていく予定です。常にハッピーエンドを目指します。

ケインがキライだった日（1）

新しい年を祝う祭りで、村の広場は賑わいをみせている。あちらで大人達も子供達も楽しそうにしているのが・・・ケインにはなんとなく面白くなかった。ケインはその日が嫌いだった。

この世界”アートフィル”では神々や精霊が新年を祝うこの日に特別な”何か”をプレゼントしてくれる、と言われている。誰に何をくれるかはよく判らないらしい。しかし、何かを授けてくれるのは決して嘘ではない。この村にも1人授かった者がいるのだから。その人は小柄な女性だが、村一番の力持ちだ。

「よう、ケイン。お前は食わないのか？」

後ろから声がかかった。振り向くと自分と同い年のラルゴが焼き鳥の串を数本持つて近づいて来た。一本をケインに差し出す。

「サンキュー、ラル。」

串にむしやぶりつく、村特性のタレがなかなかだ。ラルゴは亜麻色の髪をしている。甘いマスクと人懐っこい性格で同年代の女子からおばちゃん達にまで人気がある。ケインは黒に近い灰色の髪で顔は悪くない方だと思っているが、女子にはさっぱり縁がない。ラルゴ曰く、”目じから”がハンパでないとのこと。ようするに目つきが悪いということなのだろう。

「今年こそ、”アビリティ”貰えるかな？15歳で貰えるとすんごいらしいからな、俺たちスペシャルイヤーだよな、今年は。」

”アビリティ”とは神々などから授かる力の通称である。そしてラルゴが言つたことこそがケインがこの日を嫌つている原因であった。

ケインかキライだった日（2）

「神様もラルになら今年はくれるかもな。」

出来るだけ、出来るだけ感心が無い風を装い返事を返す。しかし、付き合いの長いラルゴには無駄のようで少し意地悪な、それでいて人懐っこい笑みを浮かべて、

「強くなりたいんじゃ無かつたのかい？」

さらりと、直球ど真ん中ストレートに聞いて来た。

そう、ケインは強くなりたかった。だが、それを神頼みにして安易に手に入れることを願う自分を嫌悪していたのである。今日という日は己の力のなさと、心の弱さを最も強く感じてしまう日なのである。

「そりゃ そりゃ ただけど… つてラル？」

こいつ相手に強がつても無駄だと返事を返そうとしたそのとき、ラルゴの体に異変が起つるのが目に入った。そして同時に、ケインも自分の体に異変を感じた。

ケインかキライだった日（2）（後書き）

iphone用キーボードゲットしました…

ケインがキライだった日（3）

何が起つてこる！

ケインは地面にうずくまってしまった。いつもと聞かない身体を懸命に動かそうとする。まるで金縛りにあつてこむように自由にならない。汗の汗が全身に浮かび下に向いている顔のあちこちから滴り落ちるのを感じた。

と、頭の中に大きな声が鳴り響いた。

（先に見つけたのは私よ！）

（早い者勝ちだろ！先に印付けてやるぜ？）

（…まーまー、落ち着いて。取りつこみつけの方が楽しいよ）。）

（（…その手があつたか？））

（〔冗談だつたんだけ…まあいいか、…じゃ僕も。僕はこっちのこするね。）

おーい、あんた達コツチのこと考えてないでしょ？…と、つっ込む前に意識が遠のってきた…。

（？…僕は？）

一瞬、今どこで何をしていたのか記憶が途切れていて理解できなかつた。

周りを見回すと、新年を祝う祭りの景色が目に入り、和やかな賑わいに満ちているのが確認できた。

（さつきからほとんど時間が経っていない…みたい。）
今度は体を確認するが全く変わった様子は無い。

「そうだ！、ラル？」

ラルゴが膝をつくのをみた記憶がかすかにある。思わず叫んで周り

を見渡すと、すぐ近くに大きな犬がいた。

その犬は亞麻色の毛並みが美しい大型の犬で、昔ラルゴの家で飼っていた犬にそっくりであった。ただしその顔というか、瞳に見覚えがあった。

「…お前さん、もしかしてラル?」

間違えていたら恥ずかしかつたので小声で話しかけると、

「ワン!」

としつかりした鳴き声が返ってきた。

「犬でもイケメンか…、あ、犬だからイケワンか。」

僕の軽口に、何を思ったかラルゴ(犬)はのしかかつて來た。

その瞬間、全ての時間の流れが遅くなつたような気がした。いや、明らかに遅く感じる。そして、ラルゴ(犬)を軽くかわす。着地したラルゴ(犬)が不思議そうに首をかしげた…。

「どうやら、お互い神様達から力を授かつて、…アビリティ持ちになつたようだね。」

「ワン!」

一鳴きしてラルゴ(犬)が頷いた。

ラルゴの尊敬する友人

ラルゴが話します。

新年を祝うお祭りが終わり、村がまた普段の装いを取り戻しつつある、そんなある日、ラルゴは村長の家にいた。

あの後、苦労してなんとか人間の姿に戻ることができた。そしてアビリティのことをケインと相談し、まず家族に打ち明け、それからアビリティについて教えを乞つためサラさんのところに話をしにいった。なぜなら、サラさんは村唯一のアビリティ持ちであるから。そうしたら、サラさんからこのことは村全体に関わることだからと村長に報告した方がよい、と言われ村長宅で関係者を集めて話し合うこととなつた。

ケインの家からは母親と兄が、ラルゴの家からは両親が、それに村長とサラさんが同席している。

村長（昔から名前で呼ばれているところを聞いたことがないので名前を知らない）はラルゴの知らない話をたくさんしてくれた。

この村にもう少ししたら王国官僚（今でいう国家公務員のこと）が来て年に一度の視察を行うこと。作物の出来柄や村の税金の使い道とか、いろいろと調べられること。その時、村にはアビリティのことを報告する義務があること（というかそのために新年の祭りの後にくるようになつて）。

「つまり、王国に2人のことを報告なければいけないのです。そして2人は王都に赴いてアビリティについて詳しく調べられると思います。」

長い話のため村長が大きく息を乱して話が中断したのを見計らつて、サラさんが一番大事なことを伝えてくれた。

「ここは王直轄の村なので、2人とも将来的には王国に仕えるように言われると思います。と言つても、いきなりではなくまず冒険者

を勧められるようです。その功績や行動、アビリティの内容によって王国のスカウトの選択肢が決まるようです。また、アビリティ持ちは冒険者になっても外国には出国出来ません。ちなみに私は冒険者にも王国へ仕えることもしませんでした…私は戦うことが怖かったから。そのため、村へ帰ることを認めてもらえたが、この村から外へ出ることは禁じられました。このことは村の人は誰も知りません…。」

サラさんは、どこか怯えたように話してくれました。どうも、王国はアビリティ持ちに敏感のようだ。

それはそうだろうとラルゴは思う。例えば、自分のアビリティは”チヨンジアーマル（動物変身）”らしいが、それを上手く使えばかなりすごいことが出来ると思つ。

ケインの母親と兄は、かなり真剣に聞き入つてゐるし質問も返している。元々ケインは家を継ぐことが無い立場なので、大きな街にも出て身を立てるこことを視野に入れていたみたいだつた。ケインの家族はケインが王国に雇われるなら文句は言わない、というより喜ぶであろう。ただ、ケインはこの村に愛着を持つてゐる。彼の父親はモンスターの襲撃から村と家族を守るために命を落としている。直接本人から聞いたわけではないが、ケインが強さを求める理由の一つだらう。どうするつもりかな？

ケインは家族よりずいぶんとのんきな顔をしてゐる。もう、これからどうするかを心に決めてゐるのだろう。普段は好きなクッキーとプリンをどちらから食べようか悩むようなヘタレだが、時々信じられないほど決断力を見せる。

ふとケインと目が合つた。不埒な事を考えていたのをばれないで欲しいと思つ。あいつはそこらへん異様に鋭いからなと心で考えていると、

「ラルのとおちゃん、ラルはどうするつもり？…ラルが冒険者になるなら僕が守るよ。」

いきなり我が家の一一番の問題に触れてくれやがつた。ラルゴは長

男で跡取り、しかもラルゴの家はこの村最大の農場と農作業者を抱えており実質的な支配者ともいえる存在であった。ちなみに村長は行商をしていたこともあり村の外の事情もよく知つており顔もきくため村長をしている、いわゆる顔役である。

ラルゴの父親は少しの間、難しい顔で黙つていたが、

「王国に属する身分である以上、ラルゴのことで何かを言われたら王国の指示に逆らう事はできない。…だが、…出来れば冒険者になつて認められる功績を立てた後は、王国に顔が利く身分で村に帰つて来て欲しい…。」

ラルゴの家にとつては確かに理想的だ。

（現実派の我が親父殿にしては希望的要素が随分強いし、不明確な要素が多すぎる、イマイチだな。）

ラルゴとしてもそうありたいが、あまり時間がかかるようでは弟に悪い。

「ラルゴの弟もシッカリしてるからさ、どちらが後をついでいいようにシッカリ決め事をしとくのがいいんじゃない？…こいつはラルゴのためを思つて言つてるんじゃない、正直、この村に憂を残して出て行きたく無いんです。人の家の話に口出しして悪いけどさ、…もう戻つてくる事ないと思うから。」

ケインは、我が家の大問題を…分かつていてもラルゴの父親が言えなかつたことをアッサリと言い切つた。

（相変わらず決断力がすつ飛んでいるよケイン、俺はもし親父殿のようにリーダーを任される立場に着いたなら間違いなくお前を手本にするよ。）

ラルゴもこれから自分がどうするかを、全力で決断したいと思つた。（ただ、あの押しの強さを何故、ガールフレンドを作る事に使えるないのかね…。）

ラルゴの尊敬する友人（後書き）

ラルゴはケインをかなり買いがぶっています（笑）

テストでテシト・ロアライブ（1）

王都に近いある森の中、3人の人間が地面に空いた入り口の奥、階段の先の暗闇を見つめていた。

1人は灰色の髪のケイン、その右横に亜麻色の髪をしたラルゴ、左横のもう一人は金髪の女性である。女性は緑眼で背もスラリと高く胸もある。顔も美しく妖精族なのではとうたぐつてしまふが耳はとんがつていな。

（まあ、年齢は俺たちより…）

ケインがそこまで考えた瞬間げんこつが落ちて来た。

「…今、私にとつて不愉快なことを考えていたな。」

痛む頭をお抑えながらこの人は絶対読心術のアビリティを持つていると心の中で呟いた。

「ケインお前、女性にそんな視線向けたんじゃ…バレバレなんだよな。先ずはタチアナさんに謝れよ。」

女性慣れしているラルゴがフォローを入れる。

「でもラル！痛い思いをしたのはコッチの方なんだよ！なんで僕が…ゴメンなさい。」

タチアナの絶対零度の視線を浴びているのに気付き、完全降伏する。「…とにかく、もう一度確認のために言つておく。このダンジョンはモンスターの駆除が終わつたばかりだから、まだ集団で襲われる確率は少ない。マップチエンジ（）も先月したばかりだし、大体1階層しか無いのだから1日で攻略できる。まさに卒業テストにはふさわしいダンジョンだ。存分にアビリティをチエックしてくるがいい。だが、くれぐれも油断するな。こここのモンスターは弱いペット（人形）しか出でこないととはい、初心者のお前達の方が間違いない弱いのだから…」

タチアナはラルゴには微笑んで、ケインには氷の視線を向けてこの卒業テストの内容を伝えて来た。

王都に呼ばれてこの一月の間、2人は戦闘技術や歴史などの学問、そしてアビリティについて学んだ。

タチアナは今回2人の師匠役を任された紋様術師である。アビリティ持ちにはその能力を高めるための紋様を体に描く。ケインとラルゴの2人に紋様を描き、その能力の解析と強化を行ったのはタチアナである。

当然アビリティについても調査した。ラルゴは予想通り”チエンジアニマル（動物変身）”であった。ケインは”ブースト（身体能力強化）”…らしい。

カインの方を断言できないのは、色々とあって、体に紋様を上手く描けなかつたせいである。

この一ヶ月で2人ともある程度アビリティを使いこなすことが出来るようになつっていた。今回はそれを実践で試すわけである。

「ではタチアナさん、行つて来ます。」

「死なないようガンバつてくるよ。」

2人はタチアナに挨拶をして階段を降りていった。

「…ハーティア、いるわよね。」

「三歩後ろにいます。」

タチアナの小さな声に返事があつた。

「隠れてサポートをお願い。生かさず殺さず、死にそうにならない限り手を貸さなくていいわ。それよりケインのアビリティの観察をお願い、今まで見た紋様のどれよりも解析が難しいの。」

紋様はアビリティ持ちに元々ある印のようなモノを筆に付けた特殊なインクでなぞることで浮かび上がる（）。

ずっと昔から紋様とその発現される能力を記録して来たことで、今日はかなりの高確率でアビリティを言い当てることが出来る。だがまったくの新種のアビリティは理解不能な事が多い。そのためにも今回は特別にダンジョンまで用意して”姿隠し”のアビリティを持つハーティアを呼び寄せたのである。

「この迷宮のあれは…2人にはまだ教えてないんでしたよね。サポ

ートが間に合わず死ぬかもしれませんよ？」

「構わん、データが取れれば元は取れる。」

「…分かりました、それでは追跡を開始します。」

ダンジョンに入りながらハーティアは心の中で2人を無事帰還させることを誓った…彼もまた1人のアビリティ持ちなのであるから。

テストでテキスト。・アライフ（一）（後書き）

マップチエンジ・ダンジョンフィールドは不定期でその構造や壁の位地が変わる

アビリティ持ちの印・力の源。^{らしい。}紋様術師にしか見えない（解析できない）。

テストでテシト・アライブ（2）

ケインとラルゴは薄暗いダンジョンの中をゆっくりと進んでいた。
「灯りが要らないのは助かるよな。」

「まったくだね。」

ラルゴの漏らした言葉にケインは前を見ながら同意の意見を返す。
人工ダンジョン（迷宮）は天井面が発光していて、灯りが要らないと説明を受けている。しかし、トラップ（罠）が発動して消えてしまうこともあるらしい。このダンジョンにはいるに当たり、2人が先ず覚えさせられたことは、目隠ししての灯りの起こし方であった。装備に關していえば、2人とも貸与された皮鎧と硬帽子、棍棒（松明にもなる）、これに予備の短剣を腰に付けている。このダンジョンに出現するモンスターのパペット（人形）は石のような材質で出来ているらしく刃物はあまり役に立たないと聞いている。

2人ともモンスターと戦った経験はない。しかし、野生の獣と戦うことによくあつた。村に野生の獣が現れ作物を襲うことが少なく無かつたのだ。特に多かつたのがスキンヘッド猪（）で、畑の作物を我が物顔で食い散らかす上に、近づくと突進して来て相手を吹き飛ばす厄介な相手だつた。村の男衆総出で退治することもしばしばあつた。村では子供だつたし、寒質的な村の代表の跡取り息子だったのでラルゴはあまりそういうことの前面に出ることは少なかつたがケインはよく前に出た。弓や槍で小物を仕留めたこともある。

ただ、剣の稽古をつけてくれた王国騎士さん曰くラルゴの方が逸材らしい。ケインでは練習試合で全く触れることのできなかつた騎士からラルゴは綺麗な一本を取つたのだ。

（僕は、この先こういう仕事で生きていけるのだろうか？）

ケインは自分の実力不足を感じると落ち込んでしまうタイプで、今も前を向いてはいるうちにいつも間にか俯いている自分に気がついてまた落ち込んでしまうことを繰り返していく。

「ケイン、あれっ！」

ラルゴの警戒の声で集中力を取り戻す。少し前方の床面の一部が発光している。そこから、ゆっくりと人型のモンスターがせり出してくる。

モンスターの頭に握り拳大の石を投げつけた。しかし、ぶつかる直前に弾かれパコッと軽い音がした。

「…やっぱり発光が収まるまでは攻撃は効かないんだな、つよつと！」

ケインは発光が収まるのを見計らって、もう一度石を投げつけた。

「いつの間に用意したんだよ… そんなの。」

「迷宮に来る途中で、2、3個ね。一応確認用だよ、実際効かなかつたし。来るよ。」

2個目の石は胸にぶつかったがたいして効いていないようだ…。

さあ、始めてのアビリティバトルだ！ケインは氣合のこもった声を発しモンスターに突っ込んでいった。

テストでハッシュトヨアライブ（2）（後書き）

スキンヘッド猪は野生の動物で、モンスターではありません

テスト用ヒント・ライナ (3) (前書き)

設定を修正しました。

粘土細工のように潰れた 陶器のように砕けた

テストでテシト・ロアライブ（3）

モンスターは人型を取つてはいるが全く生命を感じさせない動きをして向かつて来た。

ペペットと呼ばれるこのモンスターはダンジョンによつてかなり違があると教えられた。

今向かつて来るペペットは大人の大きさほどで2人よりも背が高い。身体つきは細身だが、腕の長さが肩から膝まであり異様に長くみえる。体の表面は茶色で光沢があり天井から発せられている灯りを照り返して正直不気味だ。顔はのつぱりとしていて表情はなく真ん中に赤く光る石のようなモノが埋まつている。

「アビリティ発動！」

突進しながらケインは大きな声を上げた。紋様術によつて描かれたラインが紫色に輝き浮かび上がる。ケインは顔や瞳にまで紋様を施されないので、ラルゴのには迫力あるし目立つね~と笑われたが。ちなみにかけ声は発しなくてもよいのだが、初心者のうちは発動のイメージを固定するために発声するように指導されている。

ペペットは両腕をでんでん太鼓のように振り回してきた。

かなりの加速を伴つて自分に向かつて来るソレを…ケインは世界がゆつくりになるのを感じながらじつくり観察した。

（…関節は無い…前腕は硬そうで手のひらはなく指？いや爪が手首の辺りから直接生えている…上腕は太いゴムひものような感じかな、伸びるだらうから注意しよう）

旋回する両手を回避して懷に飛び込む。タチアナからゆつくり感じるのは身体能力が上昇し加速しているからだと言われた。

（狙いは足首！）

思いつきり棍棒を振り下ろす。ビキリとビビが入るのが見えた。両手による旋回攻撃のため足を踏ん張つているのを観察していたのでここを傷めれば旋回攻撃ができないと踏んだからだ。

案の定、パペットはバランスを崩して次の旋回攻撃に移れない。

同じくアビリティを発動させたラルゴが、ここぞとばかりに棍棒を振りかぶって跳躍した。パペットはケインを無視して片腕を前方のラルゴにつき出そうとしてた。

（…相打ちくらいのタイミング、被害はラルの方が大きい、…やらせない！）

一瞬でパペットの側面に回り込み棍棒で腕を突く。止める事はどうきなかつたが、攻撃方向を狂わせることに成功した。ラルゴの渾身一撃が振り落ろされる！

がきん、といい音がしてパペットの頭部が陶器のように碎けた。崩れ落ち、完全に動かなくなつたこと確認して2人は歓声を挙げた。

テストでテシト・アライブ（4）

「しかし、その”限定発動”って便利だね。」
パペットを倒し、2人は背中合わせで座りながら水筒の水を飲みながら反省会をしていた。

ケインはラルゴのアビリティ”アニマルチェンジ”による跳躍は自分のアビリティ”ブースト”より勢いがあつたように感じた。ただし、動物の姿になつていたわけではない。

「タチアナさんがアビリティは型が決まつているわけではないから、自由な発想で使えつていつてたからさ。まつなんとなくできるかなつて練習してたら、…なんとかなつちゃうもんだよな、…アビリティつてオモシロイな。」

”アニマルチェンジ”は自分がよく知つた動物にしか変身できないらしい。アビリティは総じてイメージが大事なようでラルゴはまだ昔飼つっていた犬にしか変身出来ない。タチアナさんの特訓で本物を見ながらなら猫に変身出来るようになつてはいたが、それ以外はまだ無理だった。

また、犬の身体能力は人間より優つているところは多いものの、戦闘に関してだけいえば武器や防具を使える人間の姿の方が有利なことも多い。なら変身しないで動物の能力だけを発現出来ないかつて考えたらしい、今回は犬の脚力だけを発現したかたちになる。

「ラルのあの動きを見て、タチアナさんが一番驚いていたのは笑えたよな。」

「…はは、でも普通に発動するよりも効果が出るまでこし時間がかかるのがネックだな。正直、同じタイミングだつたらケインならたくさん攻撃できるし。」

「うん、…それで…別の話がしたいんだけど…僕の動き、おかしくない？」

「どこが？」

「つて、自分でわかんないから聞いてるんだってば。」

「わけ分からん、…もう少し説明しろよ。」

ケインは少し迷いながら、

「僕のアビリティは”ブースト”っぽいって言われてるじゃない？ ただ、過去の記録を見してもらつたけど、なんか違うような気がして。どつちかつていうと”ヘイスト（加速）”に近い気がするんだ。」

「でも、ヘイストはほとんど筋力は上がらないって話しだる。その話、タチアナさんも調べてくれるって言ってたじゃないか。」

「… そなんだけど、… ラル、実はタチアナさんに話していないことがあるんだ。」

「… わかった、話してみろよ。」

「… 一旦、周りを見渡してパペットが湧いてきていのを再確認してからケインはアビリティ獲得のときの自分の頭の中に響いた”誰か達”の会話のことを話した。

「… つてことは、2人の神様にアビリティ貰つたってことか？」

「… 多分。」

「まあ、それじゃ気になるよな。… うーん、たしかに言われてみると… ときどきケインの姿が見えなくなる気がする。早くて目で動きが追えないだけなのかもしれないけど。」

「… そつか… ありがと。あと、ラルの方も気になるんだ。」

「は？」

「僕はラルが倒れるのを見てから、自分の身体に異変を感じたんだ。あの人達の会話から感じて3人目の人つてラルにアビリティを授けたっぽいんだけど。ラルが倒れた原因がアビリティ獲得なら、ラルも…。」

「… じゃ、なにか。俺も2つアビリティ貰つたってことか？」

「正直あの時、頭の中がぐるぐるしてたから、本当にそんな会話が有つたかも自信無いんだ。」

「… まあ、いい方に考えろよ。2つアビリティ貰つたかもしれない

なんてすごくないか？ウルトララッキーだよ。たとえそうでなくて
も損はしないし。」

ケインはラルゴのこんなところを羨ましいと思っているが、絶対言
わないようにしている。そんなことをいえばお互い恥ずかしくなる
だけだ。

「……だな、そろそろ探索を再開しようか。」

「OK」

「それと、さつきのペベットへの攻撃、あれやめろよ。」

「なんで？」

「大振りで、隙が大きすぎる。僕が攻撃を逸らさなければ大変なこ
とになつてたよ。」

「……結果オーライで、いいだろ。」

ケインはここでラルゴの声が少し変わっていたことを、怒っていた
ことを気付けなかつた。そのことを後になつて随分後悔することにな
る。

テストでテクスト。『アライフ』(5)

「アビリティ発動！発動！もつと早く動け！自分！」
焦りと混乱で息が苦しい。ペペットの攻撃をかわしてから一気に距離を取る。ペペットと同質と思われる障害物に身を隠して、様子を伺いながら息を整える。

（さっきラルと倒したペペットよりずっと強い！…ラル、死ぬなよ。）

ラルゴがいると思われる壁の向こう側をチラリと見ながら親友の身を心配する、そして打開策を見出す為に先ほど起こったことを思い出す…。

「結果オーライじゃあいくつ命があつても足りないよ。」

「ラルゴの行き当たりばつたり的な考えを否定する。」

「そもそもラルは基本家に帰ることを視野にいれているんだからもつと慎重に動けよ。」

「家は関係ないだろ！！お前何様のつもりだ！！」

「もの凄い怒鳴り声が帰つてきてケインは正直びっくりした。」

「…そうだ、アレだろ。初モンスターを俺が倒したんで嫉妬しているんだろ。みつともない！」

「はあ？そんなわけないだろ！」

「いーや、お前はそんなやつだね、前にミーナちゃんにお前が告白しようとしたとき、呼び出した俺にミーナちゃんが告白してきたからむつちや嫉妬してたじやん。」

「それこそ今、思いつきりカンケーないだろーラルは後先考えなさすぎな上にジゴチューだよ。」

「だーかーらーっ（？）」

ラルゴがさらに何かを言い返そうとしたそのとき、2人の間にポン
という音とともに白い煙があがり、煙の消えた場所に1人の子供が
立っていた。

その姿は、美しいの一言に及ぶ。性別や年齢を超越した存在に思
えた。神だと言わればそのまま信じたと思つ。

「とりあえずわかったから。全て僕に任せて…ゲームで解決しよう。

全くわけの分からぬことを言わされました…。

テストでテシト・アラライブ（6）

「ほぐのことはGMCつてよん。ルールをせつめいするね、いまからこのだんじょんふいーるどをつにわけてそれぞれ1たいずつペベツトをよういするから。さきにたおしたほづがかち！しつもんはないね」

「ツコリと笑いながら神？のような子供は一方的に説明を始めた。そしていきなりケインの方を指差して、

「…と、そのまえにきみはジャマだからたいしゅつ」

ポン？と音がして振り返ると、ケインの後ろ三歩ほど位置に煙が上がつたのがみえた。

「今誰かの人影がチラツと見えたぜ。」

見える位置にいたラルゴがケインに説明した。

「じゃ、よういするね」

と言つて子供がポン？と煙になつて消えた。

静まり返つた空間で2人は目を合わせた。鏡でみれば、今の困惑した顔はお互いそつくりだろうと思つた。

やがて、フロア全体が大きな音お立て始めた。一番外側の壁以外、壁という壁が床面に吸い込まれてなくなる。あちこちにペベツトが見えたが皆、出現したときと逆に床面に沈んでいった。

もの凄い広い空間ができあがつたと思ったら、今度は逆に床から50センチ角のキューブ（立方体）がドンドンとせり上がって来た。空間を2分する壁とランダムな位置に小山（こぢらは適度に配置された障害物だと思つ）が出来上がって来た。

「うわ？」

いきなりケインは煙に包まれ、気が付くと見たことの無い場所に立つていた。4つある壁面の1つがキューブで、今までに完成しつつあった。

（反対側に転移させられた？アビリティーダメだ間に合わない！）

全力で向かうものの、到着する直前に壁が完成してしまった。

（じや、スタート）

どこからか声が聞こえた直後、床の一部が発光し始めた。先程倒したペペットが現れたときよりはるかに大きな範囲が…。

（さいごにルールのせつめいをもうひとつ、さきにたおしたペペットのところにだけ、ちじょうへのかいだんをよういするからね）

「ツーラルー！！」

ケインは向こうに聞こえないと、届かないと思つても、叫ばなければいられない気持ちだった。

テストでテシト・アライブ（7）

今回はラルゴが語るお話です。

ラルゴはパペツトがいる場所から随分離れた場所で寝転んでいた。ゲームが始まつてからすぐの攻防で棍棒は折れてしまつていた。犬に変身して駆け回つて今に至る。

（隠れ鬼ごっこは卒業したつもりだつたんだけどな。）

案外平氣でいる自分に驚きを感じている…。

（バカケインはこいつを倒せるかな。）

時々、近づいて短剣で攻撃したが（アビリティで変身すると、服とか身につけているものも取り込んで変身することができる。意識しないと出来ないので、まだときどき失敗して人間に戻るときに裸になつてしまふこともあるが）全く効かなかつた。

武器のいらない、それでいて攻撃力のある限定発動アビリティも覚えればよかつたと思う。たとえばゴリラの力だつたらこのキューブ投げられたかもしれない。

（まあ猫で手こずつてるんじや、他の動物では無理すぎるけど。）

幸いなことに背の低い犬にとつて50cm角のキューブは視線を遮るいい障害物だつた。キューブは高いところどころで3段（計1.5m）まで積み上がつている。

（…ケインならこの状況どうするかな？あいつだけでも地上に脱出してほしいけど。）

あの説明からするに1人しか外に出られないらしい。

最もあいつは1人で出ようとしないんだろうけどと思つていたとき、いきなり壁が…4つの壁で出来てゐる、四角い空間を作る1つの壁、つまりキューブが積み上がつて出来たものが大きな音とともに弾け飛んだ。キューブ縦横2つづつ計4個分がこちら側に押し出されるかたちになりその分だるま落としの要領でキューブが下に落ちた。

当然、天井に近い最上部に穴の空いた空間ができる。
ラルゴは笑いながらそこを見上げていた。

（あいつらしいや。）

すぐにそこには彼が、：先程バカ呼ばわりした親友が現れた。

テストで「トヨシトヨ・トマライフ（7）（後書き）

次で戦闘は終わらせたいです。

テストでテジト。・アライブ（8）

ケインは素早くあたりを見渡して、パペットと、ラルゴ（犬）の位置を把握した。結構な高さをひらりと降りる。そして一気にダッシュしてラルゴのところまでかけよる。

「壁から離れて！」

注意してから振り返ると、轟音が鳴り響いてキューブの壁が崩れパペットが現れた。

「無事でなによりだけど、出来ればあれを連れて来て欲しく無かつたよ。」

「壁を壊してくれたからもう用無し！――ラルゴかたづけて。」

「俺か！しかも2体！」

「無理？」

「むりむーり。」

「じゃ、2体2で……」

ケインはパペットから距離を取るために、走りながら幾つか策を話した。

「OK！アビリティ発動！」

ラルゴは犬に変身してパペットの1体に向かつ。

パペットは2人で倒したものより頭1つ分大きいし速さもある、力の強さは見ての通り重いキュー・ブを軽く殴り飛ばす。かたちの違いは腕のさきが爪のようなものではなくつてトゲトゲのある鉄球とこぐらいだ。腕は振り回すより直線上に射出することが多い（チューン付きで巻き戻される）。

（僕達に戦闘技術はない！けど――）

1体のパペットに向かい攻撃を交わしてすり抜け、ラルゴを追いまわすもう1体に近づく。ケインに誘導されたパペットが追いかけてくる。ラルゴもケインの方に向かってきて、2体のパペットが同時に鉄球を射出する！

（今！）

いまから行おうとすることを強くイメージする。

（アビリティ全開！！）

自分に向かいくる鉄球を棍棒で打ち付けて軌道修正し、ラルゴに向かう鉄球に回り込む。

犬のラルゴに向かつて打ち出された鉄球の軌道は下向きのため先程より強く打たなければならない。

（いけー！ホームラン！）

かきーーんと金属バットのような乾いた金属音を残して鉄球はパペツトの方に向かう。
見事命中！2体とも胸に大きな穴が空いてズシンと大きな音を立てて倒れた…。

「ういーなー…ええとにんげんのほう…たぶん。」

…随分と大雑把な勝利宣言が聞こえた。

テストでテグト。アライブ（9）

「よくせいかいをえらべたね」

何時の間にかケインのすぐそばにいたGMはパチパチと拍手を送つてきた。

さつきは神々しい感じがしたが今はイタズラっ子にしかみえない。「ペペットとおなじいろにしたし、キューブのかべもつみあがるのもみせたから、だぶんだいじょうぶだとおもつたけど

「大丈夫なわけ…」

反論する前にGMはポン？と音を立てて消えた。

（しうひんは、ペペットのめのほうせき、いいねで売れるよ。あと、ボーナスあげるね。きみたちのアビリティは2つだよ。）
床面から階段がせり上がつてきた。天井面の一部から外の明かりが見えた。

（たのしかつたよ、またあそぼうね）

「…一方的になやつだつたね。」

「ホント、正直もう会いたくないぜ。」

2人で宝石をペペットの顔から穿り出す作業をしていくと、「ケイン、あのさ、最初のペペットを倒したとき、俺が無茶したのは、…お前がなんとかしてくれるつて思ったからだ。」

ラルゴがいつになく素直な口調で話しかけてきた。

「…きずかなくてゴメン。…僕もセラルを信じることにするよ。」

このときケインは生き残ったことより、なぜか、"生きている"と"がとても嬉しかった。

タチアナ史上最大の屈辱

ケイン達の騒動があつた日から数日後、術師会館の比較的簡素な部屋にタチアナはいた。

今回の顛末の報告、というより査問会である…。よくつもまあ長老達がこれだけ集まつたものだとタチアナは驚いた。
(いくら私が王国一の美貌の持ち主だといっても、…みんな暇なのね。)

やがて、最長老が声をかけて来た。

「さて、タチアナくん。こっちへ来てくれるかな。」

長老達の席の近く、対面する位置に椅子がある。

タチアナは礼もせず、そこに座る。その態度に長老達から不満の声が上がる。

(いびりたければいくらでもしなさいよ。)

タチアナはここにいる誰にも頭を下げたく無かつた。

「ただの報告会だ、堅苦しくする必要はないよ。」

ほとんど会つたことが無いのでよく知らなかつたが、最長老はどつたら話のわかる人物のようだ。

「じゃあ、始めよ…今回の件の報告書はもうつていい。新種のアビリティの調査のため、高い金を払つてダンジョンを用意した、Aランクの冒険者も雇つた。

だが、結果として調査は失敗した、
ダンジョンは今侵入不可能だと。

…これで間違いないね。」

「…はい。」

拍子抜けするほどは話しが早い…。これならすぐ終わるかもとタチアナは少し期待した。

失敗というより言葉に反応してか、また長老達から不満の声が上がつたりしてザワザワし始めたが、最長老は手を上げてそれを制した。

そして、ここからタチアナにとつては予期しない展開になつた。

「タチアナ君に落ち度はないから特に懲罰はなしだよ。…ただ、調査からは外れてもううね、師匠役も終わりだ。」

「了承しました…。」

「じゃあ、その件は終わりにしよう。」

あまりにも甘い裁定と早い査問の終わりに返つて戸惑つてしまつた。

「じゃあ、タチアナ君はこちらに座り直して。」

長老達の席のはじつこ、つまり末席を指してそこに座るようにタチアナに指示がでた。

（…目的は何？これから何が始まるのかしら？）

「じゃあ、ハー ティア君を入つて。」

扉から入つてくるハー ティアに、今回雇つていった姿隠しのアビリティを持つ男に視線を送る。

「わざわざ来てもらつて済まないね。」

「お気になさらず、上司が最長老によろしくといつておりました。」

ハー ティアが挨拶を返す。

「皆に説明しておこう。彼は私の知り合いの配下で冒険者だ。タチアナ君の要望に彼を押したのは、その私の知り合いが信用が置ける人物だと推薦してくれたからだ。」

周りの反応を確認するように少し間を置いて

「…今日は彼の上司が私に気を利かせてくれてね、面白い話を持つて来てくれた。ハー ティア君、君の口から報告してもらえるかな。」

「はい、…今回の依頼はアビリティ持ちのケインとラルゴの2人を監視して、新しいアビリティの情報を得ることでした。結果的にそちらはなにも得られませんでした。」

しかし、2人は面白いことを話していました。

タチアナは自分の方をみようとしないハー ティアの話つぶりに、自分に不利になる話が始まると予想し…的中した。

「2人ともマルチアビリティ持ちの可能性があります。」

ハー ティアが2人の会話を再現するように話しながら報告すると、

部屋の中はどよめきに包まれた。

2つ以上のアビリティを持つ者をマルチアビリティ持ちという。非常に珍しいケースな上に、一度に2人ともなると前例がない。

このとき、最長老の視線にタチアナは気がついた、そして意図するところも。

「非常に興味深いことで、これから追跡調査が必要になる。

だが、残念なことにタチアナ君が今、それを外れたために後任を決めなければならない…さてどうしたものか。」

（…私から2人を取り上げて、…これほどのサンプルを奪つて、それを誰が研究するのか決める席に私を座らせて！

これが本当の罰なのね、なんていやらしい。）

心の中で、タチアナ史上過去最大級の憎悪が渦巻いたが表情には出さない。そんなことをすれば最長老を喜ばすだけだ。

その後、タチアナは一言も発言することもなく、ただ椅子に座つてこの拷問が終わるのを待つた。

ララカルの街にて…冒険者業に就職（1）

王都からさほど離れていない位置にララカルという街がある。海に近く、山も近く、農作も盛んで、工業地帯もある上、温暖な気候で観光スポットとしても人気がある街である。

（…つまり冒険者としては、仕事が多くて理想的だよな。）

ケインはラルゴと繁華街を歩きながらそんなことを考えていた。

「ねえ、ハーティアさん、あそこは？」

「ああ、この辺では有名なお菓子のお店でね…」

ラルゴが案内をしてくれるハーティアさんに気になる看板、お店、服装など様々な質問を浴びせていた。ハーティアさんもいちいちそれに付き合つて説明してくれる。

（やめてくれよ…田舎者丸出しだよ…。）

王都での訓練を終えて、2人は王国の官僚から、暫く冒険者をすることを進められた。特に強力なアビリティ持ちはそのまま王国に雇われる（今までいうと公務員になるってこと）こともあるそうだが、ケースとしては少ないらしい。返つて気楽でいいとケインは思う。タチアナさんはケインはなぜか王都を出ることが決まってから会うことができなかつた。苦手としているので積極的に会いたい相手ではないがお礼くらいは言いたかつた。一応手紙は置いて来たが、ラルゴも出発前日に1度だけ話せただけだといつていった。

今回はハーティアさんという先輩冒険者が相談役として自分達に配置された。冒険者として拠点となる街を決め、冒険者として生活する場所となるパーティーハウス（通常ハウスと呼ばれている）を紹介し、冒険者として登録してファーストミッションをこなすまで面倒を見てくれる、そんな役を彼は王国から受けているとのことだ。

「もうすぐ1件目のパーティーハウスに着くからね、さつき言ったとおりまず筆記と面接が絶対あるよ。

因みに私は外で待つていてるからね、私と一緒にいると判断力や決

断力がない人物だと判定されるんだ。緊張しなくていいから頑張つておいで。」

（うへ、そんなこと言われると余計に緊張するじゃん。）

ケインはそういうフレッシャーにいつも全然動じないラルゴが羨ましいと思う。

やがて、案内された建物の前でハーティアさんと別れ2人は中に入つていった。

ララカルの街にて…冒険者業に就職（2）

カンカンキンキンと音が響く。

早朝、2人はハーティアさんに剣術の指導を受けていた。

二人掛かりで切りかかって行つても全然平氣で、逆に切り返される（ハーティアさんはわざわざ歯を潰した練習用の剣を用意してくれていた）。

（Aランクの冒険者って、すごいすぎ。）

「剣はこのくらいにしましょう。次はアビリティを使って全開で来なさい。」

ハーティアさんは剣を置いて木でできた短剣を持つて構えた。ケインも短剣にする、こちらは本物だ。

「ラルいくよ、アビリティ発動。」

ハーティアさんの正面に高速で移動し左右に動いて攻撃のタイミングを探りながら隙を作ろうとする。

と、後ろからラルゴ（犬）が噛み付こうとするがハーティアさんは振り向きもせずによけて拳骨を下ろす。

「（ゴシン）はい、脱落。バレバレだよ…。」

（自分が氣を引いて、ラルが奇襲。悪くないと思つたけど…。相手が悪すぎ。）

ケインはさらに早く動くことをイメージして側面から攻撃を仕掛けれる。

ハーティアさんの左拳がケインの顔に伸びてくる。かわして懐にはいった。

「おじうつー！」

何が起きたかわからなかつた。何時の間にか地面に這いつくばつている。ハーティアをみると攻撃したままの姿勢で止まつてくれた。膝蹴りを顎に受けたようだ。

「あんな誘導に、引っかかっちゃダメだよ。」

手をヒラヒラさせながらレクチャーする。

「これがＳＣＭ（ ）。大いなる過去との連環記憶、王国がアビリティ持ちを冒険者になることを勧める理由だ。」

2人は罰としてスクワットを指示しながら話を続ける。

「過去の遺跡、ダンジョン、過去の魔法文明が作つたモンスター達。それらに長年、接することにより科学でも魔道でも説明のつかない身体能力の成長や知識が身につく。

たとえアビリティ持ちとて、これを得た者に相対すれば勝つことは容易ではない。」

ラルゴと目を合わせてみると、同じことを考えているとアイコンタクトで返して来た。冒険者として十分な実力をつけるのは、はるか彼方、先の先、長いな」と実感した。

「ちなみに昨日のパーティーハウスからは採用を見送るつて連絡が来たからね。」

とどめを刺されました。

ララカルの街にて…冒険者業に就職（2）（後書き）

SCM：スーパー・チーン・メモリー

ゲームでいうところの経験値を表現する苦しい言い訳。本来SCMはサプライチーンマネジメント（材料の生産から需要・購入に至るまでを一つのチーンにみたてた経営・管理の一手法）の略語

朝の修行の後、支度をしてパーティーハウスに向かう。今日のパーティーハウスは本命になるだろうと説明してくれた。なんでも対応が丁寧で良心的なパー・ティーハウスとし有名ならしい。

「それにしても、ケイン君のアビリティは不安定ですね。タチアナさんはそんなに腕の悪い紋様術師ではないと聞いているのですがねえ。」

ケインが聞いたところによるとタチアナは若手有望株の一人らしい。他のアビリティ持ちがタチアナのところにメンテナンスをしに来たときには聞いたのだ。紋様は描いておしまいというものではなく、月に一度の頻度でメンテナンスが必要なのである。描いた者が担当する必要は必ずしもないが、メンテナンスは描いた者、またはその門下生が担当するのが普通だ。

ハーティアさんの呟きに、爆笑という反応をしたものがいた。ラルゴだ。

「それには理由があるんですよ、タチアナさんがこいつに紋様を描いている最中に緊急のメンテナンスが入ったんです。相手が貴族ですぐには来いって言われて。

しうがなくタチアナさんはそこからハイスピードで描いたもんで、アビリティは不安定、アビリティの解析も上手くいかなくなつたつて。

だから、タチアナさんはケインをみると自分の駄作をいつも見せられてる気分になるから嫌なんだつて。」

あの冷たい視線は僕ではなく紋様に向かつてたわけだ…僕が嫌われていたわけではない?よつだ。

「紋様のリライト（上書き）は1ヶ月は間を置かないといけないはずだから…、そろそろリライトが出来るんだろう?ならパーティーハウスが決まってからですね。」

パーティーハウスごとに懇意にしている紋様術師は違うからね。「ハーティアは哀しい者を見るような、生暖かい視線を送ってきた、やめて欲しい。」

「そろそろ着くよ、その角を曲がってすぐだ。行つてらっしゃい、骨は拾つてあげるから。」

最後に変なことを言つてきたがハーティアさんのセンスはこのところ同行してもらつて理解している。

「頑張ります。」

「骨を拾われてやるぜ、待つてくれ！」

調子を合わせたラルゴの返事に力が抜けしていくのを感じた…それはそれで良いことなのだろうとと思うことにした。

「ラカルの街にて…冒険者業に就職（4）（前書き）

この作品を読んでいただき本当にありがとうございました。
感謝感激雨あられの心境です。

ララカルの街にて…冒険者業に就職（4）

ハーティアが語るお話です。

パーティーハウスに入ったケイン達がまっすぐ受付（と言つてもバーのカウンターのようなところ）に向かっていくのが見えた。

ハーティアは2人の後ろから入ったのですぐ近く、ケインの三歩後ろにいた。当然、姿隠しのアビリティを使って忍び込んだのである。

「冒険者のパーティーハウス”遅咲きのスズラン亭”へようこそ。

御用はなあに？」

栗色の髪の毛をしたちよつとふくよかだが、愛嬌があつて、どこか包容力があつて、笑つたとしたらコロコロ笑つてくれて釣られて笑みをこぼしてしまいそうな、そんなことを感じさせる、将来いい奥さんになること間違いな知つて感じの若い女性が話しかけてきた。

「わつ、私達はアビリティ持ちのラルゴとケインと言います。本日は、お、御社じゅなかつた、きつ、貴社の冒険者のパーティーに参加させていただきたく思いまして、まかりこしまかりました！」

（…ラルゴ君、もう君ホネ状態だよ。：サララも引いてるし。）

絶望に打ちひしがれながらも、ハーティアは希望を込めてケインに視線を送った。

「ラルもういい、かわろう。」

我らがケイン君が前に出て話を引き継ぐ。

「すいません緊張してます。改めてお願ひします。僕達2人に冒険者になる機会をください。」

ケイン君はそう言つて頭を下げた。

「王都からの新人さんね。でも良くここが見つけられたわね。うちは小さいし、”ここにちは冒険者のお仕事さん”にも応募も出してないからだれかに教えてもらつたのかしら。」

ヤバイと思って、脱出の用意を始める。

「ハーティアさんからこゝが本命だと言つて連れてこられたんだけ
ど…。」

その途端、サララの体から黒いオーラのようなものが見えた気がし
た。「ティーが…全世界の半分を敵に回すアノオトゴがここにきて
いるのね。」

もの凄いことを言われたと、動きを止めてしまったことを後悔した
が後の祭り。サララはカウンターから出来て自分の足元をさした。

「3秒あげる… 3、 2、 1」

「ゴメンなさいゴメンなさいゴメ… ゲコッ？」

サララの指差した足元の位置に時間内に姿を表して土下座をして誠
意を見せたが… 踏まれた。

「ヤツパリ、ハーティアさんついて来てたんだ。」

ケイン君が半眼で…見下ろしている！

（ここは先輩冒険者として威儀をしめ…）

「あと100回！」

サララの命令に従い、踏まれたままの姿勢で謝り続けた（爆涙）。

「ケイン、なんか聞いていたのか？」

ラルゴ君が信じられないもの見るような顔をしながらケイン君に聞
く。

「イヤ、今朝からハーティアさんやたらハイだつたし。昨日のパー
ティーハウスのこと報告したときもダメダメだった事を聞いて安心
ていたし、多分…」

「ここに足を踏み入れるのが怖くって、この子達をダシにしたんで
しょ。」

ちょっと、力を入れるのを強めないで弱めて欲しいですね。

「ちなみに、ナゼ全人類の半分を敵に回したんですか。」

「アビリティを使って、こともあるうて私の妹の着替えを覗いたの
よ…」

「誤解だつて！あれは不可抗力だべしつ！…」

強く踏まれすぎて喋れなくなってしまった…。言論の自由よ、いざ

「ぐー

「…えっと、ラルと近くでお茶して来ますから、『ぐるり』と。」

「…」

「さりげなく1桁増えてません?」

「…」

「…私?もちろんホネを通り越して灰になりました。」

ララカルの街にて…冒険者業に就職（4）（後書き）

王都の名前はまだ思いつかないのに、ララカル（街の名前）はすぐ
に思いつきました。不思議ですね。

ララカルの街にて…冒険者業に就職（5）

カリカリカリカリカリ…、鉛筆で書く音が静かな部屋の中に響き渡る。今は”遅咲きのスズラン亭”で筆記試験を受けている。

筆記試験の内容は簡単だ。だが、冒険者になるには必須の技術を問うものである。

なぜなら、この国の農村では識字率が低いので字が書けないものも多い。数値を扱う算術はなおさらなのだ。

ケインは元々村を出る事も検討していたので、父親のあとを次ぐ予定であつたラルゴの勉強に付き合つたかたちで色々と覚えていたのが役に立つた。

「昨日は本当にゴメンね、ティー君がみつともないとこ見せて。

」

（ティーがティー君になつてゐるから仲直りしたみたいだな。）
テスト中に話しかけてくるサララさんの態度にどんなものかと思つたが、緊張を解いてくれようとしていることが雰囲気的にわかつたので気にしないことにした。

「本当にハーティアさんのあの態度はびっくりしたよ。でもなんか昨日よりずっと楽しそうですね。」

ラルゴが言葉を返す。

「そうなのー昨日は皆で払つてて、お父さんはいつも通り放浪の旅出でるしリリカは基本寄宿舎で寝泊まりしてゐるし、一人つきりだつたから結構ブルーつだつたのよ…、そんなときティー君が久しづりに帰つて来たじゃない？もう、ティー君でば…（ハンドレス）」
結局試験時間のほとんどをお喋りに使つていたので、付き合わされたラルゴが大変だとケインは思つてはいたがそうではなかつたらしい。筆記試験後もラルゴはサララさんと話を続けている。

（あいつ、本当に女性と話すのつまいよな…）

ちょっと羨ましいが、あんな長さの会話は自分には出来そうもない。

その後、面接があるはずだつたけど、ハーティアさんの推薦だからと省略された… ティー君は信頼されているらしい。

それから裏の練習場に出て実技試験を受けた。

「皆出揃つてるから私が相手をするね、本当にゴメンね。私、アビリティのメンテも最近してないし、相手にならないかも…。」

そんなことを言いながら、モジモジしているサララはとても可愛い女性だとケインは思った。

しかし、

「ラル、あれなんに見える？」

ラルゴが苦笑いをしながら

「モーニングターだる…、あのダンジョンで戦つたペペットの右手を思い出すな。」

そう、モーニングターについている鉄球は普通なら握りこぶしくらいの大きさなのだが、サララのそれはボーリングの玉並みの大きさだった…。

ララカルの街にて…冒険者業に就職（6）

地面に寝そべつて、ケインはラルゴと空を見上げていた。

「ラル、空は広いな…」

「ああ…ケイン俺はな、海にでてみたいんだ。そしてどこまでもどこまでも遠くへ…」

「…現実逃避しているとあっちの世界に…招待ですわ」

2人とも全力で転がつてモーニングターの攻撃を回避した。サララさんはモーニングターを自在に操る。起き上がったところで反撃を試みるも2人同時に吹き飛ばされる。さつきから同じことの繰り返だ。

またもやケインは無様に地面に打ち付けられたが、今度のラルゴは違つた。

猫に変身してひらりと着地したのである。

（アビリティを使いこなして來たな。）

そうケインが思つたとき、信じられない速さでサララさんがラルゴ（猫）の元へと向かい拘束した。

「キヤ～可愛い…！」

ラルゴはサララさんにキュウと抱き締められ…白目を向いていた。

「一人脱落…かな？」

”キン！”

上空で何かの音がしたので、自分の存在を完全に忘れたように猫をハグするサララから視線を外し上を見上げた。

（空を飛びながら、誰かが戦つている…）

2人の人物が見えた！そのうちの一人が吹き飛ばされてこちらの近くに落ちてくる。

そのままでは地面に激突してしまつ、と感じたケインはアビリティを発動して落下点へと走つた。

（気を失つている…ヤバイ！間に合つつか…）

さらにスピードをあげることをイメージする。

だが、

（ツ！間に合わない！）

ケインが諦め掛けたその時、視界にもう一人の人物が入ってきた。ケインを追い越しながら目線を合わせて来た。そして、落下する人物をすくい上げる。

またケインと視線を合わせる、その意味をケインは理解した。

（勢いを殺し来れない！僕がしたに？）

勢いを殺さず落下点に到着、そして、女の子をお姫様抱っこしてい る女性をお姫様抱っこして、アビリティで強化した筋力で受け止 める。

「ありがとう、少年！。私はアルパカ40ナインのアメジストメン バーです！これからもよろしくね！」

なにか、お礼？自己紹介？の仕方に疑問を感じてケインは返答に困 つてしまつた。

祝！内定…いきなりクエスト（一）（前書き）

いつも読んでくれてありがとうございます。
感謝感激アメジストです。

祝！内定…いきなりクエスト（1）

ラルゴ視点のお話です。

ラルゴは軽いめまいを覚えながら、意識を取り戻した。
(…実技試験、終わったのか?)

今いるのは、パーティーハウスの共有フロアでソファに猫の姿で寝転んでいる。

近くでサララさんが見知らぬ女性と話しているのが聞こえた。

「…本当にサララは変わっていないわね、ハーティアさんが氣の毒だわ。」

昨日の話でもしているのだろう、意識がはつきりして来たから人間の姿に戻つて起き上がる。

「ラルゴ君、起きたのね良かつた、ゴメンねちょっと強く抱きしめすぎたみたいで、本当にゴメンね。」

「気にしてないですよ、それよりこの方は?」

話をしていた女性は美人であつた。しかも格好が何か普通で無い、歌手のようなきらびやかさが有つた。

「彼女はアルパカ40（フォーティー）ナイツ・アメジストメンバーのシャイナよ、以前私もアルパカのパーティーに入つてた事あるから知り合いなのよ。」

ラルゴ達は、ララカルに来てまだ3日しかたつていながアルパカ40ナイツの噂は聞いていた。女性だけの冒険者パーティーハウスでアイドル活動もしていると…。

「アルパカ40ナイツの話は聞いてます、この街最大級のパーティーなんですね。でも、アメジストメンバーって?」

「アルパカ40ナイツのランクよ、最高位のルビー、その下にアメジストメンバー、クリスタルメンバー、原石チームつて続くの…、ラルゴ君、貴方に出会えたことに感謝！…感謝！これからよろしく

ねー。」

（要するにファンになれってことだよな、この人、押しのが強いからケインだつたらもう勢いでファンクラブに入れさせられてそうだな…）

そこで、ケインのことと試験のことを思い出した。

「その話はまた今度ね、ケインは？あと試験は？」

サララさんに詰め寄る。

「合格よ、あなた達はうちのパーティーに入つてもらつわ。」

：ぐぐつと押し寄せる歓喜を抑えて、

「ありがとうございます。これから宜しくお願ひします。ケインは何処ですか？」

「ここだよ…」

疲れた顔をしたケインが荷物を抱えて扉から入つて来た。どうやら宿を引き払つて来たらしい、ラルゴの荷物もある。

ケインはシャイナさんのところに向かつて近づいて行つた。

「リリカさんを送つて来ました。帰りに目を覚ましたので少しひつくりされましたけど。それでコレなんですか？」

ケインは一枚のカードをシャイナさんに見せて来た。

「…案外しつかりしてゐるわねあの子、個人ファンクラブのメンバーカードよ。まだパーティーに入つてないから正式なものではないけどね。まあ、貴方もあの子も試験でコテンパンにされてた仲だし、大事にしてあげて。」

「あの子、合格ですか？一応気になるので…。」

少し赤くなつてゐるあたり、ケインはその子に気を持つたのかもしない…、それともシャイナさんにかな、奥手だから積極的な女性に弱いんだよな、あれ？

「リリカさんて、もしかしてさつき話していたサララさんの妹さん

？」

「やうなのよ、私も気になつてたの。リリーはどうなの？」

サララさんがシャイナさんに問いかけた。

「…私だけで決められることじゃないけど、飛翔のアビリティをあれだけ使いこなしてたし、今までの経験からなんだけどOKになる可能性は高いわ。

でもうち敷居が高いから、確実とは言えないからね。」

少し困っている、正直で、嘘は言えないタイプのようだ。

「あつ、それからこれをアルパカ40ナイツのルビーって人から預かって来たんだけど。」

ケインが手紙をサララさんに渡す。

封を開けて読むうちにサララさんの顔が真剣なものに変わる。

「ケイン君、ラルゴ君、ファーストミニッシュョンよ、しばらくアルパカ40ナイツのところに行つてもううわ。」

目をケインに向けると、ケインは物凄い表情になっていた…ラルゴが尊敬する、気合の入ったケインがそこにいた。

（俺も負けてられない！）

ラルゴも拳を握りしめて全力を出す事を心のなかで誓つた。

祝！内定…いきなりクエスト（2）

暗い夜、ついに待っていたモンスターが姿を現した。“デビルハンド”という、人間でいうと肘から先の部分だけが地面からは生えたような怪物で大きさは3mを超える。

ケインは急いで松明に火をつけて“デビルハンド”の周りの地面に次々と刺していく。夜なので明かりが必要なのだ。ラルゴはヨモモそうで作られるお香を入れた大きなカゴを持って走り回っている。そのお香の煙でモンスターを包み込みように風向きに注意して、そして声をあげた。

「準備OKです！」

4人の女性が姿を現した。

「――「アルパカ40ナイツ・アメジスト！愛ゆえに只今参上！」」

全員、煌びやかな衣装に身を包み灯りを反射するような装飾品をつけている。そう、この4人の戦闘を夜でもよく見えるようにする為の裏方を務めるのが今回の2つの依頼内容のうちの一つだ。

アメジストメンバーは全員Aランクの冒険者で、リーダーをシャイナさんが務める。

シャイナさんが“飛翔”的アビリティで夜空に浮かび上がり戦闘は開始された、上空から戦況を見極め、全員に指示を送るのだそうだ。デビルハンドは形を微妙に変えながら襲いかかる。あんな手に掴まれたらケインならその瞬間アウトだろう。5本の指も針の様に鋭く形を変えながら連續で4人を狙う。

そんな光景を、女性が少し離れたところから見ている。この女性は自分の見たモノを、聞いた音を、遠い場所に送る事ができる。今この光景はララカルにある巨大スクリーンに映し出されているはずだ。モンスター退治をエンターテイメントにするイノベーションは凄いと思う。ただ、最初ケインはあまり気が乗らなかつた。

しかし、アルパカ40ナイツの設立時の話を聞いて気が変わった。

男尊女卑の激しいこの時代、女性の地位向上の為に数人の女性がパーキィーを立ち上げた。無力な女性の希望になる様に、差別に打ち勝つ力を得る為に人生と命を捧げた。アイドル活動による人気取りも、この命がけのショーも全ては女性たちの”未来”のため。

4人は派手なアクションを交えながらデビルハンドを追い詰めた。

「――――4人の心を一つに！未来に輝きを！フォーティナナイツ・アメジストスペシャル・ラブアクション！！！」

4人お攻撃が決まりモンスターは霧散する…（？）

体にきしむ様な痛みが走った…、思わず跪く。

4人の冒険者は整列して女性に手を振つていたが、女性が手を上げて終わりを教えるとその場にへたり込んだ。

ただ、シャイナさんがこちらに声をかける。

「少年達！その場で横になつてじつとしていなさい。高レベルモンスターを倒した事で大量のSCMを浴びたからあなた達ではきついはずよ。」

ラルゴも座り込んでいる。ケインはゆっくり仰向けに転がり空を見上げた。

（本当の強さつて行つたいなんなんだろつ。僕は強くなつたら何にその力を使うのだろう。）

…体の痛みではなく、心の痛みを感じた。今夜は眠れないかもしないとケインは思った…。

祝！ 内定…いきなりクエスト（3）

コンサート？の翌日、ケイン達はある湖を目指して川辺を川上に向かって歩いていた。

デビルハンドの出現した場所と近かつたので2つ一緒に依頼された仕事である。

「ホントは原石チームが担当する仕事でね、よその男の子に依頼しない仕事なんだけどね、大規模なモンスターの討伐があるかもしけないってことで皆待機なのよね、私は正式メンバーに選ばれてのフアーストミッションだから来たのよね。」

喋っているのは、リリカちゃん、サララさんの妹で白銀の髪をしている14歳で、‘飛翔’のアビリティ持ちだ。今度アルパカ40ナイツの正式メンバー（原石チーム）に選ばれたばかりの女の子だ。ケインは彼女に会った事があった。彼女が採用試験中に墜落して意識を失った時、彼女のパーティーハウスまで背負つて送つて行つたからだ。

今回は彼女を含め3人でこなす仕事である。

内容は湖にいるキラキラ貝の採取で難易度は低い。ただし、湖にはキラキラ蟹というキラキラ貝を身につける習性のあるオシャレな蟹型モンスターが襲つてくる事があるので注意が必要だ。

この貝は、見た目が綺麗だが、宝飾品としては長持ちしないので市場ではあまり人気がなくお店には出回っていないらしい。しかし、戦闘をこなすため、激しく動くため、長持ちしないアルパカ40ナイツの衣装につけるにはうつてつけであるとの事。

「それにしてもハーティアさんが来てくれなかつたのは残念だなあ。

「ラルゴが本当に残念そうに言つ。ハーティアさんは自分達がファーストミッションをこなすまで一緒に行動してくれると言つていたが、急遽仕事が入つたとのことでアルパカ40ナイツと行動をともにす

る前に別れていた。

「ハーティア兄さんがいてくれるとどうでも安心だったわよね。」

そう言えば、ハーティアさんはサララさんとずいぶん前から付き合いつているらしい、年の離れたリリカちゃんは兄の様にしたつていると囁く。

「まあ、いろいろと教えてもらつて成長したし、今回のミッションは自分達の力でなんとかしよう。」

ケインの言葉にラルゴはニヤリとした笑みを返した。ケインが自分のアビリティを実践で使ってみたがっているのを知っていたからだ。それ以上に今の自分が”自分の力”、”自分の強さ”にこだわっているのを言葉にせずとも彼はわかつてくれている。

「もうすぐ着くはずよね、急ぎましょー！」

リリカちゃんは飛んで行こうとしたので慌てて後を追う。

祝！内定…いきなりクエスト（4）

地元の人達から、キラキラ湖と呼ばれるその湖にケインは到着した。波打ち際の砂浜がキラキラ輝いているのは、キラキラ貝のかけらが含まれているからだろうか。湖は半径200m程だろう、それほど大きいわけでもないから深いところは少ないかも知れない。

湖の上を一周リリカが偵察をして帰ってきた。

「中でキラキラしたのが動いているの！ヤツパリね、先輩が言つたとおりにね、かなりの数のキラキラし蟹がいるわね。」

出来れば会いたくないが、好物？の貝を掘っているのを見られたら襲つてくるのは確実だろう。

「私ね、上から見張つてるね。貝はよろしくね！」

そう言つと、リリカちゃんは浮かび上がりケイン達の頭上を旋回はじめた。

「やるか！」

そう言つてラルゴがミーー熊手を持つて砂浜を引っ搔く。ビリヤリゴの辺りの砂浜が一番大きくて掘りやすそうだ。ケインもラルゴに続いて砂浜をひつかく様に掘り始めた。

…しばらく掘つてソコソコの量の貝を集められた。ただ腰が痛くなつてきたので伸びをした。上空ではリリカがダンスの練習をしていた。

空中で舞い踊るその姿はキラキラと輝きとても綺麗で、リリカちゃんの魅力を存分に發揮させていた。

（あの衣装もキラキラ貝だよな、素敵だけど…何か引っかかる…なんだろ？）

ダンスをしていたリリカちゃんがいきなり大声をあげた！

「きやあ！蟹さんが集まつて来てる！」

波打ち際の水面が盛り上がり、大量の蟹がキラキラしながらに向かつて來た。

(キラキラが好きなんだから、あの衣装をみればくるよ…なんでも
つと早くに思いつかなかつたんだ!)

「あいつとあいつらアルパカ40ナイツのファンだぜ! 」

「ハル」の「冗談を聞いて笑えないけどありそつとケインが思つたとき、
「じゃあ、攻撃できない? 」

トリリカちゃんがファン思いな言葉を発した。

「…ファンじゃないから、ゼッタイ。」

自分でも聞が抜けていふとしか思えない言葉を、ケインは疲れたよ
うにつぶやいた。

祝！内定…いきなりクエスト（5）

ケインとラルゴは、大量の蟹型モンスター・キラキラ蟹から逃げるため砂浜から離れ、近くの林の中に身を潜めた。キラキラ蟹はケイン達を追つてくると思ったが、砂浜で塊り頭上のリリカちゃんに向けてハサミを振つている。

「本当に、リリカちゃんを見に来たファンみたいだな。」
ラルゴのつぶやきに、ラルゴはハツとなつた。

（せうだ、リリカちゃんを見て集まつて来たんだから！）

「リリカちゃん！歌つて踊りながら向こう岸まで飛んで行って！」

ケインの言葉の意味を了解したことを伝えるためか、リリカちゃんは両手で丸を作つた。「みんな～？今日はありがとう？私の初ステージ！リリカ、みんなのためにラブパワー全力で頑張ります！」
よく通る声でファン？に挨拶をし、先程ケインが見た舞をセリフ付きで踊り出す。

「…ジェンダー、ジェンダー、あなたの心に届いてー。私は女の子なのー！それは私の誇りなのー…」

ゆつくりと湖に向かつて行く。キラキラ蟹達はそれを追いかける様に湖に戻つて行つた。

ただし、1匹だけ砂浜に残つた蟹がいた。一番大きく立派で硬そうな甲羅をしている。右手は大きなハサミ、左手は小さなハサミをしている。

なんと、その小さいほうのハサミで2人で集めたキラキラ貝を器用に甲羅に付けているではないか。

「ケイン、あれじや今日の収穫はなくなつちまう。奪い返そつぜー…」
ラルゴは戦闘準備を始めた。アルパカ40ナインのアメジストメンバーは今日帰つたが道具係の馬車が待つてくれている。それでも明日には出発する予定なので今日貝を集めて持つて帰らなければミッションは失敗したことになる。

「絶対に持つて帰ろう。2人とも無事で。」

後半の言葉は自分に言い聞かせるようにつぶやき、ケインも用意を始めた。

祝！内定…いきなりクエスト（5）（後書き）

誤解を招かないようになりますためにこの文章を書きます。

私はジエンダーのことは専門家ではありません。

パーティーハウスのアルパカ40ナイツが設立された理由を女性の地位向上としているため、啓発活動として歌詞に織り込んでいいると
いう設定です。

祝！内定…いきなりクエスト（6）（前書き）

いつも読んでいただいて本当にありがとうございます。
勢いでガンガン書く分、誤字脱字、変な言い回し、設定のハスなど、
多々あると思いまが、ご容赦ください。

祝！内定…いきなりクエスト（6）

キラキラ蟹は強かつた！ケインとラルゴの2人がかりでも余裕を見せている。

（砂地がこんなに戦いづらいなんて！）

しかも時々吹き出してくる泡はぶつかって弾けるときに強い衝撃を発生させる。ラルゴは犬の姿で移動して攻撃だけ人間に戻るというパターンを繰り返している。一本足の自分が一番動きが鈍い。なんとか林のほうにおびき寄せようとするが、キラキラ蟹は浜辺に集めたキラキラ貝から離れない。

「ケイン！俺が注意を引くから一発大きなのかまとしてやれ！」

了承の合図をラルゴに返してケインは意識を集中した、

（アビリティ発動、僕はとつても力持ち！）

先日、アビリティのリライトを行いわかつたことは”ブースト（身体強化）”の筋力強化に対する発動効率が10%ほどだったということだ…つまり、スピードは上がっていたが筋力はほとんど上がっていないなかつたのだ。筋力がアップしたのと今の2人の武器・鉄の棒（金銭的にまだ剣は買えなかつたが、木の棍棒より攻撃力が高い）で破壊力は飛躍的にアップしている。

鉄棒を振りかぶつたままジリジリと砂をしつかり踏みしめながら回り込む。ラルゴが犬の姿で正面から気を引いてくれている。キラキラ蟹がラルゴを挟もうと大きなハサミを繰り出したタイミングで一気に跳躍し振り下ろす！

つと動きを見られていたのか小さいほつのハサミをいきなり突き出されたが、腰の小袋を切られるものの直撃を回避して渾身の一撃を甲羅に叩きつけた。

（…シビれる…。）

あまりに硬かつたため衝撃で鉄棒を落としてしまった。甲羅は全く傷ついていない。

「逃げる！」

ラルゴの必死の叫び声が聞こえたがキラキラ蟹は田の前、…動けない。

だが、キラキラ蟹はケインには田もくれず砂浜に落ちたカードを小さいハサミで拾う。

やがて、どこか嬉しそうに体を震わせて湖の中に戻つて行つた。

「…なにを取られたんだ？」

ラルゴが不思議そうに聞いてきた。

「…リリカちゃんの個人ファンクラブの会員カードを…。」

確かにあのカードはやたらキラキラと「コ」で有つたので…まさかとは思うが…。

（本当にファン？）

確かめる術もなく、する氣にもなれず、…この疑問は一生解けないなと思った。

祝！内定…いきなりクエスト（6）（後書き）

実はあのキラキラ蟹はかなり高レベルなモンスターでまともに戦つたら勝てません。

ハーティア上司（前書き）

「いつも読んでいただきて、感謝！感謝！

今回のオープニングはアルパ40カナイツ・アメジストメンバーの
シャイナが担当します。

今回の話はすずらん亭の看板娘サララの元彼で今彼に戻ったハーテ
ィアのお話です！」

ハーティア上司

ハーティアが語るお話です。

コンコンと扉をノックして、若手の職員は入室することを知らせ紅茶を載せたトレイをハーティアの上司の執務室に運び込む。ハーティアの上司が紅茶好きなのは、皆に知られている。最もそれは自分が入室しやすくするためだ。

栗色の髪の上司は、目立たないタイプの中年男だ。ハーティアは上司の肩を軽く叩き、忍び込んだことを知らせる。

上司は、若手職員が退室した後、秘書官を用事言い付けて退室させる。

「1」苦労だったな、追加の仕事までさせてしまつて。」

「お気になさらず…、3件報告があります。」

秘書官が帰つてくるまでなので、ハーティアは早速話し始めた。「例のマルチアビリティの2人は予定どおり、誘導できました。今はすずらん亭にいます。ただし、問題がありました。」

「紋様がらみか?」

「はい、すずらん亭の冒険者の面倒をみている紋様術師は決して能力の低いほうでは無いのですが、ケインの方の紋様を描くことができませんでした。結局、もう一つの仕事のため同行してもらつていたタチアナ女史に描いてもらいました、内密にですが…。相手の紋様術師も長老には報告しないと言つていました。」

「当然だらうな、自分が無能だと報告するよつなものだ。」

この王国の紋様術師は長老という各紋様術一門のトップが集まつて成り立つていて。今回の研究サンプル（ケイン達のこと）を獲得したのはフーバー老師で、話にでてきた紋様術師はその門下生に当たる。

「トランス状態にして行ったのでケインは気づいていませんがね、

後、ケイン達のファーストミッションは直接見れませんでしたのですずらん亭いる既知に報告書を頼んでおきました、こちらです。」報告書をみたとき、上司の目元が少し下がったのをハーティアは見なかつたことにしてあげた。

「…苦労を…コホン、君には苦労をかけるな、いつも、いやまつたく。」

会話を変えるため、ハーティアは次の話をした。

「…ええ、そう言えば少し気になることがあります。アルパカ40ナイツの介入を受けたのですが。」

「それについては、君に連絡できていなくて済まない。紋様術師達の方でフーバー老師が2人とも独占するのはズルいという話が出ていてな、結局リシェル老師が1人受け持つことになった。」

「…それは、…ルビーの指図でしょうか?」

「おそらくな、リシェルはルビーの紋様術の師匠ではあるが、ルビーの崇拜者だ。先日の査問会のことも当然話していたはずだ。」

「当然これからはもつと介入があるであろう、すずらん亭はハーティアにとつてかけがえの無い人がいる場所で最も信頼のおける場所なので2人を連れて行つたのだが。ルビーが相手では一筋縄では行かない。これは少し本気で調べる必要があると、彼の直感が告げていた。

「…次ですが、例のモンスターの封印は無事に終了しました。タチアナ女史が予想以上の実力の持ち主で助かりました、若手最高の実力者と最長老が薦めるだけあります。」

「丁度、貸しができたところだったからな。いい取引だつたな。」

「…はい。最後の報告ですが…」

秘書官の気配が近づいてきたことを感じて、小声で早口に説明した。秘書官が入つて来たところで、するりと外に出る。

「アチャチャ！」

後ろから、悲鳴が聞こえた。

(猫舌なんだよな…あの人)

結構時間が立つていいはずだからかなりぬるいんじゃない?と心の中で突っ込みながらその場を去った。

ハーティア上司（後書き）

ハーティア上司はいつたい誰か伝わりましたでしょうか？

ケイソヒカルのわかれ道（前書き）

いつも、感謝・感謝です。

ケインとラルゴのわかれ道

地面に寝そべつて、ケインはラルゴと空を見上げていた。

「ラル、空は広いな…」

「ああ…ケイン俺はな、夕日をみていると走りたくなるんだ。どこまでもどこまでも夕日に向かって…」

「…イケナイ子達に、オホシ様をプレゼント いつもより多く降らせています」

先日の試験と似た、デジャヴ感のようなものを感じながら吹き飛ばされた。

（1つでもかわせなかつたモーニングスターが4つも飛んで来たらしかわせる訳ないじゃん！）

サララさんは先日のモーニングスターより一回り小さいが、2つの鉄球を付けたモーニングスターを両手に持つて自在に攻撃して来た。一度にクレーターが4つ出来る。

今日はパーティーハウスの裏の練習場で朝からずつとサララさんの特訓受けていた。

「冒険者が相手の実力を見誤つたら、お終いよー…そつ、あなた達もう死んでいるのよー」

サララさんはファーストミッションでキラキラ蟹と戦つたことをひどく怒っていた。

「格上と戦わなければならぬときは、必ずあるわ。でも、もつと考えて！あなた達が死んだら悲しむ人がいることを…」

「…荒れているなー。サララ。」

不意に横手から声がかかつた。

「ルーク！お帰りなさい。早かつたのね！今支度を…」

「せつかくだから、俺も混ぜてくれよ。」

金髪イケメンのルークと呼ばれた男は、軽く叩き首をしきしきと鳴らしながら練習場に降りて來た。

「始めてまして、後輩君達。俺はルーク。自己紹介はサララとのウオーミングアップをしながらするよ。」

そう言つと、ゴリラに変身した。

「”アーマルチェンジ”！」

ラルゴが驚いたような声を上げる。

少し離れたところに2人で移動してサララの繰り出すモーニングスターを軽く弾き返しながら、

「鳥に変身して、他のみんなより先に帰つて来たんだ。ラルゴ君、キミは僕と同じアビリティだよね？」

「…喋つていい…」

ケインは思わず声にだしてしまった。

「修行を積めば動物のままでしゃべれるのさ、…参考にしてくれ。じゃあ行くよ！」

そう言つと、今度は黒ヒョウに変身して一気にサララさんに襲いかかる！サララさんは兩のよろにモーニングスターを繰り出して距離を稼ぐ。すると今度はカラスに変身して上空に舞い上がり旋回する。「黒ばつか…、意図的？」

ケインがつぶやいた瞬間、今度は鮮やかな体色のカワセミに変身してサララの胸にクチバシを突き刺したように見えたが、そこにはサララをお姫様抱っこしたルークがいた。

「ゴメンなさいね、せつからく最後はわかりやすい攻撃にしてくれたのに。練習相手にもなれない…」

「その目ではしあうがないよ、おつとこんなことしてるとハーティアに怒られるな。」

サララを優しく下ろす。サララさんはモンスターの毒で左目の視力がほとんどないらしく、そのせいで冒険者を引退したのでそうだ。そのとき、ケインの横にいたラルゴがルークのもとに突進した。そして正座して、

「師匠！弟子にしてください！」

炎のように燃えた瞳をルークに向けてラルゴは大声で叫んだ。

小さな依頼（前書き）

ヒロイーン登場です。

小さな依頼

天気が良いその日、ケインはサララさんから依頼された洗濯物を干しを終えてからハウスの共有フロアに向かいカウンターに座った。サララさんはもういない。用事を済ませるために出かけたのだ、遅くなるらしい。

今、ルークのチームはラルゴを連れて依頼をこなしに旅立つていな。ケインはサララさんと一人きりで留守番である。

カウンターには課題が置いてあり、サララさんが戻つて来る前に終えなければならなかつた。

「…ええと、戦つている最中、依頼人が別のモンスターに襲われました。あなたならどうします…、か。」読みあげながら、頭をひねる。

コンコン、と扉を叩く音が響いたので玄関に行き扉を開ける。そこには、ケインより1、2歳年下と思われる女の子が立つていた。

「あなたは、冒険者ですか？」

「はい、新米ですが。」

「よかつた、あなたに相談：依頼があるのでお願ひします。」

ペコリと頭を下げる。

「…今、担当の者が出払つておりましてその後ではいけませんか？」正直ケインは焦つた、以来の受け方も知らないのだから。

「あなたに、です。話だけでも聞いてください。」

その勢いに押されて、なかに通してしまつた。

結局、話を聞いてケインは依頼を受けた。今、2人で移動している。

パーティーハウスにはサララさんに当たた手紙をおいて来た。

内容は、紛失物の探索依頼だった。大事な預かり物のネットクレスを

紛失してしまったそうで、今向かっている草原で落としたのはほぼ間違いないのだと言う。ただ、そのものの自体の価値は低く、彼女（マリアと名乗った）もお金はそんなに持つていなかつたらしく他では断られたらしい。

「今日中でないといけないので、『ゴメンなさい…。』

「僕に謝る必要はないよ…。」

ケインも最初断ろうとしたが、『謝れば許してくれる人です。でも、見つけられる可能性が少しでもあるなら、私はそれをお全力でしたいのです。』と言ったときの瞳に強い意思を感じた。心が動かされた、この人を今日は見ていたい思った。その為にサララさんに怒られてもいいと…ちょっとと思つた。

指定した場所に着くのは多少時間がかかった。本来馬車でいくべき距離なのであるが、時間もお金も無いので、身体強化してお姫様抱っこして走つた。最初怖がっていたが、スピード感が気に入つたのか途中から喜んでいた。

「じゃあ、落としたときの行動を教えて。まず、その範囲を探してみよう。」

「はい、…ええと。」

2人で歩き捜して回る。面頃になつても見つからな方のお弁当を食べた。サララさんが作ってくれていたサンドイッチを持って来たのだが、2人で半分こした。マリアは随分喜んで味わいながら食べていた、きっとお腹が減つていたからだろう。小鳥の鳴き声がよく響き渡る、一心不乱に探したからか、心が気持ちよかつた。このところ、ケインは気分が良くなかった。ラルゴと離れたこともそうだが、この先自分がどうしたいのか、イマイチわからなくなつていたのだ。探し物一つに全力を尽くすこの娘の姿が羨ましいと思つている。

「ありがとう、すっごく美味しかったわ！」

笑顔でマリアはお礼を言つて來た。作つたのはハウスの人だからと返事を返して、また探し物に戻つた。

その後、範囲を広げて探すものの見つからなかつた。

「…時間だわ、…終わりにしましょ。」

マリアが時計を見ながら終わることを伝えて來た。

「もうすこし、いいけど?」

帰る時間が遅くなるからあまり進められないが、一応聞いて見た。

「いえ、この時間までと、決めていたから。気を使つてくれてありがとう。」

それから草原を抜けて道に出たあたりで、さりげなくマリアを見た。唇を噛んでいるが瞳は後悔していないと語つてゐるようだつた。

「私なんかの、こんな小さな依頼の為に一日付き合つてくれて、本当にありがとうございます。本当に感謝しているわ。」まっすぐ自分の目を見つめながら語る彼女に胸がドキッとした。知らず、一步下がる。

(?)

靴の裏に違和感を感じ、足をどけてみると何かあつた。

「それ!」

マリアが急いで拾い上げる。

「すごい、見つかった!」

ありがとう!と何度も繰り返す彼女に、照れながら運がよかつたねといつのが精一杯だつた。

帰りもまたお姫様抱っこだつたが、疲れていたのかすぐマリアは寝てしまつた。おかげでドキドキしているのに気づかれないで良かつたとケインは思いながら時々彼女のかを見つめた。

昨日までのつまらない気分が吹き飛んでいた。ケインの心は炭火のようなじんわりとした暖かさに包まれてゐる。今日は、とても疲れたが大きな収穫を得た。

「ありがとう、マリア。」

心から彼女に、…落し物をしたことに感謝した。

■手写で初クレースト（1）（前書き）

遅れですいません。

両手に花で初クエスト（1）

カタコト、カタコト…馬車の揺れが眠りを誘うのにあがらながら集中力を維持する。

今は、依頼人の荷馬車に乗つて移動しながらアビリティの修行中である。街の近郊にある村からの依頼で討伐系のクエストである… ズズ。

「寝るな！」

と隣の人物に手加減なしで叩かれた。

「…すいません。」

まずは謝る。これが大事だとここまで道中で学習した。

「誠意の無い謝罪などいらん…、全く鍛えがいのない弟子だ、ラルゴは剣もアビリティも筋が良かつた上に礼儀を知つていたぞ。」

…ナゼ？を心の中で繰り返す。

今隣にいるのは2人。1人はサララさん、これはいい。今回の依頼は冒険者ギルドから取得したギルドクエストだ。因みに先日マリアから直接受けた仕事はハウスクエストというそうだ。僕の為に軽めの依頼をサララさんが請け負つてくれて、2人で行く予定であった。

だが、なぜかもう一人、ここにいるはずのない人物がいる。紋様術師のタチアナさんだ。

「アビリティは集中力が大事だ。せっかくわかりやすい私が紋様を描いてアビリティが安定したのだから今度は持続的に発動できなくてはいけないのだ。」

「…えつとこの前、他の人に紋様を描いてもらつたから師匠が描いたんじゃないですよ。」

一応呼び方は”タチアナさん”、ではなく”師匠”にしてある。タチアナさんは一瞬狼狽えてから、

「き、昨日メンテナンスしたではないか！だからもう私が描いたよ

うなものだ！そんなことよりもっと集中…」
と黙らされてしまった。

サララさんは修行の邪魔になるからとずっと静かにしている。
両手に花といえば聞こえはいいが…、ケインは昨日のことを思い出
していた…。

パーティーハウスの共有フロアでサララさんから今回の依頼のレク
チャーを受けていたとき、ノンノン、ヒドアをノックする音が聞こ
えた。

ケインが玄関の扉を開けて…すぐに閉めた。

「誰？」サララさんが聞いてきた。

「誰もいなです…目の錯覚だから気にしないでくだ、あばー。」

蹴飛ばされて開いた扉に吹き飛ばされて奇声をあげてしまった。

「…元師匠を目の錯覚と言つとは…教育が足りていなかつたか？」

「アルパカ40ナイシ？」

そこには、あり得ない格好のタチアナさんが立つていた。

「あなたが、サララさんですね。私は紋様術師のタチアナと申しま
す。王都でこの者の師匠をしておりました。まずはこの紹介状を。」

「タチアナさんは絶世の美女ですが、天変地異があるうとこんな格
好はしません！ニセ者です！」

「今の発言、前半は事実だが後半は違う、私に似合わない服はない
！」

「会話がずれてません？それと…私からいつのもなんだけど…本当に
にうちに入りたいの？」

サララさんは渡された手紙を読んでから、タチアナさんに少し不思
議そうに問いかけた。

「フム、では説明しよう。紋様術師のギルドの老いぼれ達が私から
仕事を取り上げたのだ、それも裏から卑怯な手で。故に王都で稼げ

なくなりこちらで、紋様術以外で研究資金をかせがねばならなくなつたのだ。同じ女性という事で、リシェル老師が助け舟を出してくれてな。」

「そう言えば、アルパカ40ナイツのルビーさんはリシェル老師のお弟子さんでしたね。」

「そう、それでアルパバ40ナンとかの原石チームとやらにいれてもらつたのだが…。」

そのもの達が私の事を心配してくれてな、まずは冒険者のイロハをという事で、こちらを紹介してもらつた。」

それは追い出されたんじゃない?とは口が裂けても言えないなとケインは思った。

「まあ、いいですよ。紋様術師なら紋様陣を使えるでしきから。」

「えつ?えつ?試験は?モーニングスター(実技試験)は?」

「うちちは大きなパーティーハウスじゃないから試験はないのよ、ティー君がやれつて言うから。雰囲気を楽しませたいっていつてたけど、からかつてただけよ。」

「な?」

信じられない事があまりにもありすぎて、倒れてしまつたケインであつた。

両手に花で初クエスト（2）（前書き）

感謝・感謝です。

今回は戦闘があります。

表現は控えましたが好きでない人は飛ばしてください。

初シリーズです。

両手に花で初クエスト（2）

ケイン達3人は、依頼のあつた村に無事到着した。そして、依頼内容の確認作業に入る。

「…では、状況はかなり変わつてきますね。」

サララさんが村の代表の若者と打ち合わせをしていたので、ケインは同席した。何事も経験である。

「はい、ですので依頼の内容を変更させてください。お願ひします。」

若者は素直に頭を下げる。

「…ここまで内容が変わると受ける事は…、ではまず、現状の確認をさせていただきます。受けるかどうかはその後にさせていただきます。」

キッパリとした言い方なので相手に意思がはつきり伝わる、サララさんは流石だなとケインは思った。

出来もしない仕事をうけられると期待させてはいけないのだ。

内容は、始めスキンヘッド猪の討伐だった。つがいが作物を荒らしてしまつらしい。大きすぎて手が出せないと事で、冒険者にいらしゃることにした。だが、その依頼を出していいる最中に、大鬼オガがあらわれたのだ。初心者の冒険者では荷が重い。サララさんの実力なら視力に不安はあるが大丈夫であるだろう。だが予定外の事態には慎重になるべきだと伝えてきてた。ケインもそう思う。スキンヘッド猪でも決して容易な相手ではないのだから。オーガは何人の村人が見かけ、1人は捕まつて食べられそうになつたらしい。その上、1人木こりの若者が行方不明になつているという。

その話の後、ケインは畑に向かった。

確かに、ひどく荒らされている。ケインは農村出身なのでコレがスキンヘッド猪の荒らした仕業だとすぐわかる。…しかし、大きな足跡も見つけた。

（…オーガが畠に？人を襲う為？）

よく見ると、キュウリやトマトが引きちぎられている。高さ的に猪ではない。さらによく調べて見ると、大根と人参が引き抜かれて持ち去られている…これもスキンヘッド猪ではない。

「ここに来た、オーガはベジタリアンなのかな？」

調べた事をサララさんとタチアナ師匠に伝えてから、自分の意見を言つ。

「そんなわけがあるわけなかろう、第一一人食されているではないか。」

「そつちの可能性が高いけど…生きている可能性もあるわ。私は受けようと思うけどケイン君の意見を聞かせて。」

決定権はリーダーのサララさんにあるが、今回のクエストはケインの修行用である。

（…これは、試されている？）

「受けるべきだと思います。今回の依頼の優先順位は人命救助、本来の依頼のスキンヘッド猪の討伐、オーガ退治の順にするべきです。」

「サララさんは上出来と言つて頭を撫でてくれた。年下扱いは遠慮願いたい、師匠も真似すんな！」

結局依頼を受けて、夜待つていると、スキンヘッド猪が2匹現れた。言われていたとおり大きい。

「ケイン君、後方に回り込んで1匹お願ひね。後、わたしだと逃げられてしまう恐れがあるから、そのときは無理しない程度に追いかけてね、本当に無理しないでね。」

了解の意思を伝えてから飛び出す。月明かりで比較的戦いやすい。サララさんは目が悪いので、近くに師匠が松明を持って待機している（まだ火を付けていないが）。

ケインの動きに1匹が頭を向けた。畠は足場が悪いので林の近くで構える。武器の短剣はまだ抜いていない。突進してくるスキンヘッド猪を静かに見つめた。

（命がけ、生きるために僕を殺そうとして向かって来ているのがわかる、必殺の意思が瞳にこもっているね…。僕も、サララさんも、村人の命のために、必殺の決意です…あなたの命をいただきます。）アビリティを発動していたせいか、異様に時間が長く感じられた。スローモーションの世界でスキンヘッド猪の、額から突き出たスキンヘッド部に両手を当て横に押す。スキンヘッド猪は全体重をかけた突撃の勢いが首にかかり骨が折れた手応えがあつた。自分が今、1つの命の灯火を消した事を全身で感じた。

その後、サララさんお方も無事倒した。

「猪の解体は村人に任せましよう、あと見張りもお願ひして、私達は明日に備えましょう。明日は早朝から行方不明者の探索に行きます。」

「了解した。」

「はい。」

自分の声が思つたよりもかすれていて自分でびっくりした。

その夜、当てがわれた村長の部屋に3人で寝た。1人で寝ると言ったのだが、2人が強引に一緒に寝ると行って布団を持って来了。（両手に花でラルゴにうらやましがれるな。）

そう思いながらケインは布団を頭からかぶつて、震えが止まらない自分の身体を日々抱きしめていた。

両手に花で初クエスト（3）

ケインはサララさんとタチアナ師匠とともに、天然の洞窟の前にいた。オーガの足跡をたどつて山の中を歩いて行くと、以外と簡単にたどり着いた。オーガの足跡はわかりやすい上に引きずつたようならともあり追跡はたやすかつた。

明かりを用意して洞窟にはいるとそこにはオーガがいた。こちらを見つめながら横になつていて、体長が3m近くあるその姿は恐ろしいものだが、肋骨が浮き出でおり弱つているのが伺えた。足に木を添えてツタでグルグル巻にしてある。周囲には食べ物が散乱していた。

「足を怪我して弱つている見たいね。でもケイン君情けは禁物よ。」
サララさんが武器を構えて近づく。オーガは諦めたように目を瞑り横たわつた。目から涙を流している。

（情に流されるな…、冷静になれ！）

ケインには何かが引っかかっていた。かわいそうだから？違う。悪さは何をした。畑を荒らして、人を一人…。畑？本当に木こりを殺したのか？周りを見回した。キユウリ、トマト、大根、人参…。（生で食べれるものばかり、…まさか…）

「…あなたは、行方不明の木こりさんですか？」

洞窟内では音がとても響く。小声ではあつたが、オーガの耳に届いたようで、驚いたように上体を起こし、なども頷いた。

何かを伝えようと喋るが、牙が多い口のせいか言葉にならない。

「あなたは、うまく喋れなくなつた、そして、文字もかけない？どうでしすね？」

泣きながら何度も何度も頷いた。

「そんな事があるのかしら？」

サララさんは驚いていたが警戒を解いていないらしく、武器をおろしてはいない。

「師匠、何か心当たりはありますか?」「…一つだけある。”禁忌”触れたのだんだ。」
師匠は少し自信なさげにつぶやいた。

両手に花で初クエスト（4）

「禁忌、ですか？」

ケインは聞き慣れない言葉だったのでタチアナ師匠に質問をした。
「可能性が高い、というだけで確定できん。」

タチアナさんは三歩オーガに近づき、

「何時に質問をする。首を降って答えよ。」

オーガの木こりさん（仮）は頭を縦に降った。

「なんじは、神の祝福を受けて、アビリティを使えるよ」になつた。

「コクリと縦に降つた。

「汝のアビリティは動物などに変身することができるものであつた。

「また、コクリと縦に降つた。

「汝はそれを誰にも言わなかつた。つまり王都へ行くのを嫌がつた。

「そうだな。」

少し横を向いて、ぱつが悪そうに首を縦に降つた。

「隠れていろいろ変身していたのだろう。しかし、オーガに化けてたら元に戻れなくなつた、それで困つてこんなことになつていると

いうところか。おおかた、足はスキンヘッド猪にでもやられたのであろう。」

オーガの木こりさんは泣きながら首を縦に何度も振る。

「確定だな、”非自然体への変化による禁忌抵触”の状態だ。」

タチアナ師匠は今度は自信を持つて言い切つた。

両手に花で初クエスト（5）（前書き）

お気に入り登録してくださった方々…、読んでくださった方々…、作者は感謝・感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

両手に花で初クエスト（5）

タチアナ師匠の説明は続く。

「アビリティとは、神や精霊などの祝福、送られたプレゼントだ、自分の力ではない。あくまで大いなる存在から力をもらっているに過ぎぬ。

アビリティはときどき使えなくなるものがいる。それはその神の怒りに”禁忌”に触れたからだと言われている。

アニマルチエンジの場合、モンスターに姿を変えたときがそれだ。いくつか報告例がある。モンスターは魔神が作り出した眷属だからという説がある。王都に行けばいすれかの紋様術師に説明されていたはずだ。」

つまり、隠していたために知らなくてはならない危険を知らず、使い方を誤ったということか。

「”禁忌”に触れた為に、神の怒りに触れた為にアビリティを取り上げられたのだ。そのままの姿でいるしかあるまい。」

オーガの木こりさんが泣きながら声を上げる。

「なんとかならないのですか？」

「姿の戻し方など知るわけがなからう。」

「…でも、師匠ならなんとかなるでしょ？」

うつ、とタチアナ師匠は少し呻いた。

「まあ、うむ、調べて見ないことには。」

「流石ですね、絶背の美女で、天才紋様術師なんて師匠しかいません！」

「あつ、当たり前のことと言つた。おまえ、絶対動くなよ…」

タチアナさんはオーガの身体を観察し始めた。ときどき手をかざしてブツブツと呪文を唱えている…。

「…欠損している、…いや、うむ…、これは…、従来の説を覆せるかもしだ…。」

そして、オーガの木こりさんの顔をみながらタチアナさんはまるで断罪の審判官のように冷たく言い放った。

「もしかしたら元の姿に戻れるかもしれない、だがかなりの痛みを伴うぞ。しかも失敗して死ぬ確率の方が大きい。…どうするか選ぶがいい。我が紋様術、受けてみるか？」

しばしの間を置いて、オーガの木こりさんは頷いた。

タチアナさんは筆を取り出してオーガの身体に紋様を描く。「アビリティを活性化してその力を使い切らせる。それまで身体が持つか運次第だ。」

アビリティに反応してか紋様が浮かび上がる。オーガの木こりさんが泣きながら、悲鳴をあげ、転がり回る。

「私は、外を見てるね。」

そういうつてサララさんは洞窟を出ていった。

ケインはタチアナ師匠と共に成り行きを見守る。

30分ぐらいした頃だろうか。痛みに失神して、ピクピクと痙攣していたオーガの身体が歪み始めた。ゆっくりと人間の姿を取る。タチアナ師匠が息を確かめた、なんとか大丈夫のようだ。

「バカ弟子よ、アビリティは諸刃の剣だ…。覚えておけ。」

言い方は冷たいが、師匠の声になぜか優しさを感じるケインであつた。

両手に花で初クエスト（6）（前書き）

いつも感謝・感謝です。

両手に花で初クエスト（6）

サララさんが語ります。

（フニフニリヤー）

サララはへ口へ口になつてフラフラしていたところへ彼が現れたので寄りかかった。

「こんな無茶をするなんて、あなたらしくもない。」

「そういうながら彼は私を横たえて膝枕をしてくれた。

（シ・フ・クの時間）

「いつもなら3人で迎え撃つところでしょう。ただでさえ…」
彼をかばって毒を受け、左眼の視力をなくしたのだ。そのことを彼は誰よりも気にしている。

「本格的に復帰するには辛いかな。」

「するつもりですか？」

「私もヤツカリ冒険者だもの、まあ復帰は取りあえず、ケイン君達の初心者マークが取れるくらいまでかな？ハウスのこともあるし。」

「ケイン君達を気に入ってくれたみたいでよかったですよ。」

「ケイン君は、あれね、戦いになるとスイッチはいるタイプね。それでいて昨夜は震えていたの、カワイイよね。」

「そうですか。」

少し嫉妬が入つてゐる あなたもカワイイ と思ひながら、

「そうね、できれば彼みたいな子供が欲しいの」

思つた以上に、とってもとっても動搖してくれた。

（カワイイ）

「…ケイン君が来ますね。」

彼の膝から頭をどかし自分の腕をまくらにして目を瞑る。

彼が姿を消すの見るのは好きではない。

「サララさん！」

ケイン君が驚きの声をあげて駆け寄つてくる。

「怪我を、まさかオーガ？」

「このくらい大丈夫よ。あのね、アニマルエンジは対象をよく知つているか見てないとダメってルークがいつてたの。つまりこの辺に本物のオーガがいるかしらって当てを付けたの。仲間（？）の悲鳴を聞いたら来るんじゃないかなって思つたら当たつたわ。」

「どうして呼んでくれなかつたんですか！」

「今のケイン君にはアビリティの知識を強化する方が戦闘経験より重要よ。」

納得のいかない顔のケイン君に、

「それより安心しないで、周りを調べて。オーガが1匹だけとは限らないもの。ハウスに帰るまで油断は大敵よ。」

と言つたら、全力で警戒を始めた。

本当にカワイイと思いながら、サララは意識を開放した…。

両手に花で初クエスト（7）（前書き）

いつも感謝・感謝です。

両手に花で初クエスト（7）

「…ラル、僕もうダメだ！」

ケインは諦めたような声を出した。

「諦めるな…諦めたとき全てが終わる。つて寝るな！」

ケインはカウンターで突つ伏して居た。今、2人はそれぞれの初クエストの報告書を書いている。ラルゴの方も進んでいないみたいだ。ギルドクエストは報告書を提出しなければならない決まりである。

なんとか気を取り直して続ける。

「夜にスキンヘッド猪を2匹退治つと。その翌日森でオーガが1匹現れたが退治つと。」

”遅咲きのすずらん亭”の共有フロアはサララさんやタチアナ師匠、ルーク達で賑やかだ。ときどきサララさんが進行状況をチェックにくる。

「どこまで進んだかしら？」

また来て、サララさんが聞いて来た。

「もう全部で来てるぜ！だから俺もあっちに行くぜー。」

ラルゴがさりげなく裏返しにして提出して逃げようとしたが捕まりチェックが入る。

「再提出！コレじゃ依頼人が退治したことになるじゃない」

「えへ、でも、そういう依頼だし…」

サララさんはハウスの仲間がいかにも活躍した風に書かないとか、アピールが足りないとか、沢山の注意してみんなのところに戻つていった。

「ふえ～。なあケイン！そつちはよかつたよな両手に花で。コッチは男ばつかだし。」

多分言われると思った事を言われて苦笑する。

「まあな、サララさんは頼りになるし、師匠は格好はともかく知識が豊富だし。」

「俺はタチアナさん、アルパカの制服似合つてると思つぜー。」

「そりやあれだけの美人だし、何を着ても似合つよ。」

「でも、残念だよな。帰っちゃうなんて。」

そう、タチアナ師匠は今回の件で王都に一時帰還することになった。アニマルジョンジのアビリティの持ち主が”禁忌”に触れモンスターの姿になつた者は2度もとの姿に戻れないというのが今までの定説だつた様で、それを師匠は覆したかたちになる。暫くは紋様術師達はそのことで騒がしくなるだろうと師匠は言つていた。そしてもう一度足場を固め治して、王都で研究生活に復帰できる様にするところへ。帰り道、そう言つて遙か遠く王都を見つめていた師匠の目はキラキラしていた。ケインも師匠は冒険者より紋様術研究の方が似合うと思つ。

（本当に紋様、好きなんだろうな。あんな風に何かに打ち込める人はどれだけいるのかな。）

少し考えることに夢中になつて手が止まつていてことに気付き再開しようとして、ふと気になつたことをラルゴに聞いてみた。

「ラル、今いいか？、僕たちのアビリティのことなんだけどな……」「2つかもつてこと、つだろ？」

「ああ。今回の件でアビリティのこと、タチアナ師匠みたいな専門家に相談した方がいいと思つたんだ。」

「ていうか、タチアナさん知つてたぜ。」

「えつ！」

「俺、王都を出る前に一度タチアナさんにあつたじやん？その時にね。」

「なんで黙つてたんだよ。」

「ラルゴは少しばつが悪そに、

「…そうしろつて。なんか、理由は教えてくれなかつた。」

ケインはタチアナの方を見た。視線が合つたせいかこちらに来る。

「私へのことでも話題にしていたのか？」

お酒を飲んでいたのだろうか？頬が赤い。

「僕、アビリティが2つあるかも知れないんです。師匠は知つてい
たんですか。」

師匠は一瞬ラルゴに視線を送つてから、

「話したのか…。」“禁忌”が気になつて相談する氣にでもなつたか
？」

「はい、でもなぜそれを僕にいわなかつたんですか？」

「いうことを禁じられていたのだ。そのことについては詳しくは話
せんが…。だが、ちようどいい。話せることを話しておこう。」

師匠もカウンター席に座つた。

「お前達のアビリティは紋様術師達の研究心を刺激しているのだ。
これから、フーバー老師の門下でラルゴが、リシェル老師の門下で
ケインが研究される。ちなみに私をリシェル老師が拾つてくれたの
はそれも関係する、一番よく知つている立場だつたからな。」

2人の反応を確認するかのように間を置いてから、

「そんなに心配するな。とつて食われるわけではないぞ。」“禁忌”
があるかどうかも調査してくれるだろ？ お前達は今までどおりし
ていれば良いのだ。」

「僕たちのアビリティかどんなものなのか、師匠は知つているんで
すか？」

「わからん…紋様術師としては悔しいの一言だ。」

それでも、ケインは心が軽くなるのを感じた。研究対象にされるこ
とはいい気がしない、だが自分達だけの秘密にするのはすでに辛く
なつていたから。

「もう今日は気にするな…それよりここが間違つていい！」

師匠はケインの報告書をみていった。

「…現在最高の天才美女と書かなければ…表現力が稚拙だな。
(これは、場を和ませる為の師匠の気配りだよな…たぶん。)

「なんにしても、ラル、早く終わらせようぜ。向こうつの、初クエス
ト祝勝会が終わつてしまつ。」

冒険者にとつての初クエストとは特別な意味を持つてゐる、成功し

た初の印クエストのことをいいパーティー・ハウス総出でお祝いをするのである（ ）。

「…主役を外して盛り上がってるんだからこのハウス、おかしくない？」

「ここ楽しいと思うよ。」

ケインはアビリティを持ったことで、随分賑やかな人生になつてきたなと思った。

自分にとつてそれは良いことなのだと…。

両手に花で初クエスト（7）（後書き）

夜中に目が覚めてしまい、アクセスを確認したらアクセス数が多くて、嬉しくなつて書いてしまいました…眠… z z z。

（ ）最初のキラキラ蟹のクエストはサララによつて失敗と判断された。

ラルゴの初クエスト（一）

少し時間は遡つてラルゴの話です。

宿のそばの公園でベンチに静かに座り鳥を見る。ラルゴは今、アビリティの特訓をしていた。

今回のクエストは、ラルゴのアビリティの訓練を兼ねての軽めのものだという。ただ、ルーク師匠はクエスト内容は必要になつてから伝えると言つて説明をしてくれなかつた。もう一人の同行者、ドワーフのドゥンガさんも教えてくれなかつた、暫くすればわかると言つて。

（ともかく集中！）

特訓の内容は鳥の観察だ、鳥になつて空を飛べるようになると色々と便利だということでアニマルチェンジの新しい変身対象は鳥に決まつた。近くの地面にいる雀を見る、枝に止まつた鳩を見る、空を飛ぶカラスを見る。

降りてきたカラスが枝に留まつたら、嫌がつて鳩が逃げていつた。カラスが小首をかしげて飛んで行つた鳩の方をみていた。

（女の子に逃げられたケインみたいだ。）

村にいた頃、よくあつた光景だ。ケインは女の子をいじめるることはなかつたが嫌われていた。いや、本当に嫌つていたのではなく眼つきが鋭いので見つめられるとコワイからという程度なのだが。そんな風に修行をしていると、ドゥンガさんがやつてきた。

「修行中悪いが来てくれぬか。依頼人が到着したので挨拶に行く。（さあ、いつちょ気合いれますか！留守番のケインには悪いけど。）気合の入りまくつのラルゴはドゥンガのあとをついていった…。

ラルゴの初クエスト（2）

今回の依頼はギルドクエストなのだとドゥンガさんが歩きながら教えてくれた。

「冒険者のギルドで受け付けた依頼を各パーティーハウスで受けるのじゃ、このとき、今回のように相手がわからぬ事もある。」「

「相手が誰か知らないんですか？」

「依頼を受けた冒険者ギルドは知っているだろ。だが、誰が依頼人か、仕事の直前まで伏せられる事はよくある。今回の依頼は狩猟の付き添いということだ、貴族かもしれん。」

「貴族相手に依頼内容が良くなくて引き受けないと、ここまできて断る事もできるんですか？」

「場合によるが、出来る。最もそうならない人選をするのもギルドの仕事だ、よほどの事がない限り断る事にならないはずだ。」

「もしかして、その狩猟の付き添いでの内容もよく知らされてない？」

「そうじゃ。」

（つまり、依頼を俺に教えなかつたんじゃなくて、教えられなかつたのか。）

やがて高そうな宿に着く。今自分達が泊まっている宿より10倍以上はお金を取られそうな宿であった。

中に入つて一室に通された。すでにルーク師匠が誰かと話している。

「おっ、来たな。『ツチツチ』。」

師匠に呼ばれて横に並ぶ。

「俺を含めて改めて紹介をしよう。ララカルの街の冒険者パーティーハウス”遅咲きのすずらん亭”のルークと、ドゥンガ、ラルゴだ。今回の依頼引き受けた、万事任せてくれ。」

陽気な声で相手に紹介をした。ドゥンガさんに続けて頭を下げる。

「お引き受け頂いてありがとうございます。ではこちらも改めて、

こちらはマドリー家のヒューズ様とご親友のアドラー家のヘイズ様にございます。私はマドリー家の者でヒューズ様のお世話をもうし使っておりますセバステイアンと申します。他にも使用人がついて来ておりますが、必要に応じてご紹介申し上げたいと存じます。羊さん、いや、執事さんて初めてみたなあとラルゴは思った。それより、貴族の2人は服装も、身だしなみもしっかりしていて参考になるなと思った。歳はラルゴより1、2上か？

「ヒューズだ。世話になる。」

「ヘイズだ。よろしくな。」

「顔合わせも終わった事だし、宿に戻ろう。セバステイアンさん、

待ち合わせ時刻は早朝4時でいいですね。」

「はい、よろしくお願ひします。」

「では、ヒューズ様、ヘイズ様、また明日。頑張ろうな。」

少し軽い言い回しだつたが、気にせずニコやかに2人が手を降つたのでルークさんは信用されているのだろう。

宿に戻つて打ち合わせだとルークさんに言われて宿に向かつて歩き始めた。

ラルゴの初クエスト（3）

「マドリー家は男爵、アドラー家は子爵の爵位を持つ貴族だ。まあ、2人の母親は姉妹で王都の有力商人の娘だ。この姉妹と俺はちょっとした知り合いでね。あいつらもちっちゃい頃ならあつた事がある。おそらく、それでご指名されたんだろう。黙つてたのは驚かすように母親に言われてたつて。昔からあの人達は俺をからかうのが好きなんだよな。」

説明しているルーク師匠はかなり嬉しそうだった。

「懐かしいもんじや、人間は成長が早いのう。」

随分と感慨深げにドゥンガさんも言葉を漏らした。

「ドゥンガさんも知つてる人？」

「小さい頃だ、向こうは覚えておらんだりつ。ルークは今だに毎年誕生日に何か送つてているようだが。」

流石師匠、勉強になります。

「それで内容は？」

「近く若い貴族の為の狩猟大会があるらしくてな、その為の特訓だと。」

なるほどね、と思うが力が抜けて来る感じがする。

「その顔は楽な仕事つて思つてるだろ？」

笑いながらルーク師匠は声をかけて来た。

「…まあ、そうかな?って。」

「楽かもしれないが相手は貴族だ、…大怪我でもさせれば死罪だつてあり得るんだ。いくらアビリティ持ちでも許されないこともある…覚えて置いてくれ…。」

笑いながら「ワイことをいわれたよ。

ラルゴの初クエスト（4）（前書き）

いつも感謝・感謝です。

総合ユニークのカウントが1000日前です。
ありがとうございます、本当に嬉しいです。
。

ラルゴの初クエスト（4）

貴族の依頼、ヒューズとヘイズの狩猟に付き合って一つ週間ほどが過ぎた。朝早く狩りに出掛け昼にはもどり、午後は村の射的場で弓の練習や剣の練習をした。ラルゴはその間はルークさんにアビリティの特訓を受けていた。

ラルゴは貴族の2人と仲良くなっていた、身分の差はあるが中身は若者、話が合つたのだ。

「…それでケインのやつはな、さんざん迷つた挙げ句に買つたばかりのプリンを落つことしてな、ミーナちゃんはカンカンだつたよ。」

「そりやダメだ。」

「で、結局告白をしようとしたんだがする前に断られちやつてさ、で、やけ食いに付き合つたつて落ちさ。」

「あははははーよしヘイズ！俺達はケインのようにならないようこ頑張らうなー！」

「だな！よし、今日こそは大物し読めようぜ。」

2人と弓や剣の技術は互角と言つたところか。やはり貴族と言つたところだ。

ヒューズの話によると10歳から1年の半分は学院の貴族専用寄宿舎で集団行動を学ぶそうで、その中に戦争の技術も含まれているらしい。

「俺達は、貴族としては下位だからな。戦争が起つたら、なにさせられるかわからぬから色々覚えさせられるのさ。」

もつとも、今2人にはヤル気はあつても緊張感がない。それもそのはず、実は狩猟大会は理由であつて目的ではない。本当の目的はこの練習を理由にここで会つ事だ。学院で仲良くなつた女の子に声をかけていたのだ。つまり、ハントティング中に恋のハントティングをするのが最大の目的なのだ。今日の午後にも意中の女の子達が到着する

る。2人とも明日いいところを見せると張り切つていいのだ。ケイ
ンの話もそんな雰囲氣で話をしていくて出て来たのである。

（武士の情けでミーナちゃんが俺に告白して来た件だけは伏せてや
つたぜ、感謝しろよな。）

ラルゴはケインに勝手な恩を売つていた、本人が聞いていたらもの
すごく早いツツコミがかえつて来てただろうなと思いながら…。

ラルイの初クエスト（5）（前書き）

総合ゴーーク1000突破しました。
本当に本当にありがとうございます！

ラルゴの初クエスト（5）

女の子達が到着する日のお昼過ぎ、ラルゴは井戸水で軽く汗を拭いた。貴族の2人は宿に帰つて風呂を浴びたり着替えたりするそうだ、おめかしするのだろう。2人のオシャレ能力は高いのでラルゴとしても今後の参考にできるだろう。

夕方には明日の狩猟のための打ち合わせがあるため、ルーク師匠はその準備で忙しい。ラルゴは1人で暇を持て余していた。公園のベンチで修行の一環で鳥を見るがなんとなく女の子達が気になつて集中できない。

（貴族の女の子ってどんな格好なのだろう？仕事だから服装は選べないけど田舎者って見られないかな？）

女の子の前では度胸があるラルゴではあるが、自分に絶対の自信があるわけではない。それでもケインと違つて、”なるよう”にしかならないだろう”という性格な分だけリラックスした会話が出来る。取り止めのない事を考えていると、公園に2人の女性が入つて来た。若くてメイドの格好をしている。

（もしかして、貴族の女の子達の召使かな？）

1人と目が合つたので、和やかに微笑み返す。向こうも安心したのか声をかけて来た。

「ここにちは…あなたはこの村の人ですか？」

「ここにちは、この村のものじゃないよ。ララカルから来た冒険者さ、ラルゴっていうんだ、よろしく。ここに狩猟に来ている貴族様の手伝いをしに来てるんだよ。」

自分の仕事まで説明したのは、おそらくこれで何か反応が帰つてくると踏んだからだ。

案の定、2人は一度お互いの目を見つめあつてから、最初に声をかけて来た子が、

「それはマドリー家かしら。私達は、マドリー家の『子息から』招

待いただいたジノ家の召使です。」

「それは偶然ですね、ここへは?」

「早く到着したので散歩です。よろしかつたらこの辺りを案内していただけませんか?」

：急に元気が出て来て2人に了承の回答を伝えたラルゴであった。

ラルゴの初クエスト（6）

今回の狩猟の練習の場になつたこの村はロロナトという村で、狩猟の場を貴族達に提供して収入を得ている。今回のラルゴ達の泊まつた宿は貴族の使用人などを宿泊させることが多い。隣接するほどではないが、貴族達が泊まる宿が近くにある。ちなみに宿泊中の警備は依頼の対象外である。

今、高級な宿の方には、マドリー家、アドラー家の息子と、その息子達が招待したレアルマ家、シーマ家、ジノ家の娘達が宿泊している。

夕方、高級宿の一室で各家の警備を担当する者達とルーク達冒険者との打ち合わせが行われている。

（…どうしよ…）

ラルゴはかなり緊張していた。何故なら、ラルゴの昼間の話を聞いたドゥンガさんが確かめたところ、ジノ家は今あまり裕福ではなく使用人は老人が1人ついて来ただけだと分かったからだ。

とりあえず、このことを黙つたまま打ち合わせが行われている。

あの2人が何者なのか、何故ジノ家の使用人を装つたかは不明だ。危険を感じるもの、下手に話すとすずらん亭の名を貶めかねない。あの2人にはかなりいろいろ喋つてしまつている。

ただ、陰謀ならラルゴを無事に返すことはあり得ないだろうということで、いまドゥンガさんが聞き込みに回つている。

ラルゴはルークさんに目を届く範囲にいろ！と言われている。何もさせてもらえない、初心者の自分ではまた失敗をするかもしれないからだ。

やがて、打ち合わせが終わり、今日は一度貴族達に顔合わせとなつた。

今夜は立食パーティーとなつていてその会場に入ったラルゴは心臓が止まりそうになつた…。

ラルゴの初クエスト（ア）（前書き）

感謝・感謝です。

ラルゴの初クエスト（フ）

（2人ともいた！）

会場には5人の貴族がいて、そのうち知っている人間が4人いた。そのうち2人が男性、2人が女性だ。ラルゴは思わず声をあげそうになつた。

「マリアベル・レアルマです、皆さんよろしくね。」

「ソフィーナ・シーマよ。」

「エリス・ジノです。よろしくお願ひします。」

顔合わせの挨拶が進む。そんな中、自分の顔色を気にしてルーク師匠が小声で声をかけて來た。

（どうした？）

（昼間あつた2人がそこに…、マリアさんとエリーさんが…）

ルーク師匠はホツと息を吐いて、

（…そうか、分かつた。）

と言つてドゥンガさんの方に向かつた。ドゥンガさんも話を聞いてホツとした顔をした。

やがて顔合わせが終わり、退室するときになつて、

「おいラルゴ！お嬢様方がお前の昼間の活躍を聞きたいってさ！来てくれ。」

とヒューズが声を掛けてきた。ルーク師匠に了解をもらつて会場に残る。

大人達がいなくなつたのを見計らつて、5人が笑い出す。どうやら昼間の話は全て聞かれていいみたいだ。

「…嘘をついてゴメンなさいね。ラルゴ君。」

エリス嬢が誤つて來た。

「悪いのは私なの！エリスを悪く思わないで。私が周りに気づかないで外に出た行つていつたから…。」

話を聞くと、エリス嬢は普段、花嫁修行の一環としてレアルマ家で

マリアベル嬢のメイドをしているそうだ。それで今回も来るときはメイドとして働きながら来たのだそうだ。服はエリスの物を借りたのだろう。

ラルゴはどつと疲れた…。一応、不審者扱いになりそうだったことを皆に話すと当の2人は青くなつた…。他の3人は大笑いであったが。

苦い顔をしているラルゴに、

「まあ、もう忘れようぜ！お前はそんなちちやな男じゃないはずだ！ そうだろうラルゴ君！」

といつてヘイズが茶化す。

「ヘイズ様笑い過ぎ！ エリス様、マリアベル様、もうお氣になさらず。」

ヘイズに言葉を返しながら、お嬢様方にはフォローを入れる。

「でさあマリア。本当のメイドだつたらラルゴと付き合いたいって思つたかい？」

ヒューズが恋のエフ話を振つてきた。強引な話題転換で助け舟のつもりなのかもしれないが、それ以前にこの手の話が好きな年頃なんだろう。

（もう俺を開放しやがれ！）

そんなラルゴの心も知らず、マリアベル嬢は変化球で答えを返てきた。

「先に100点見ちやつたのよねえ、80点かなあ。」

首を傾げる皆に気を使い、この答えを唯一理解したエリス嬢が通訳する。

「実はこの前、コリアベル様はララカルで1人の冒険者と出会つているんです。その方がとても誠実な方だつたようでとても気に入っているみたいです。あつこれ、他の人に秘密にしてくれますか、コツチもお忍びだつたので。」

「エリー、今はマリアでいいって言つてるでしょ。メイドしないの！ それより、ソフィーナは…」

このあと暫くは恋バナで盛り上がる5人であったが、
(抜けるタイミングにがしたゞ助けてくれゞ)
ラルゴの心の声は誰にも届かなかつた…。

ラルバの初クエスト（ア）（後書き）

お約束の展開、捻りなし、ですかね。

ラルゴの初クエスト（8）

ラルゴにとつて散々だつた日の翌朝、ヒューズとヘイズの狩猟練習大会が始まった。このロロナトの村は管理された狩猟場なので獲物は多い。2人とも張り切つて別々の方向へ獲物を探しに向かつた。ラルゴはヘイズの方に付いていた。ヒューズの方にドゥンガさんが付いている。

今ここにいるのは、ヘイズとマリアベル嬢と護衛の2人である。

（最も俺は護衛にカウントされていなけど…）

「それにも、冒険者の方つてもう少し頼りになると思つていたんですけど、そうでもないのね…。」

ヘイズにマリアベル嬢が少し残念そうな顔で話をする。

「古い果物を食べたつてことだからね、まあ、お腹を下してもしょうがないよ…。」

そう言つて事実を知つて、ヘイズがフォローする。

実は思つたよりも護衛が多かつたのでルーク師匠はアビリティの訓練をしようといつて来た。先ほどの理由で2人はいないことになっている。

「いいなあ、その小鳥さんヘイズにばかりなついていて、私の方に来てくれないかしら。」

（絶対嫌だよん！）

小鳥はラルゴが変身した姿であった…。

ラルゴの初クエスト（9）

ラルゴはヘイズの肩に留まって、小鳥のふりをしていた。

頭を振り、尾羽を小刻みに動かす。普通の小鳥の真似をして、仕草を練習する。マリアベル嬢と護衛の方達に気づかれないで合格だ。マリアベル嬢は気になるらしく、ときどき手を差し伸べてくるが一度とんでも逃げて元のヘイズの肩に泊る。

「いいな…」

「なんか、コツチで餌をあげてたら懐かれてさ。」

「そう！ 餌！ 何をあげているの？」

「ええと、『オロギとか…』

「無理ですね。」

ヘイズとマリアベル嬢は親しい雰囲気でいい感じではある…。だが、ヘイズの本命はソフィーナ嬢である。というかヒューズもそうである…ラルゴはこの数日付き合いでそれを知った。

今日はヒューズに気を使ってソフィーナ嬢との仲を取り持つ様に、マリアベル嬢とエリス嬢を誘った。昨日のうちに壮絶な打ち合せがあつたらしい。

しかし、ソフィーナ嬢が女の子一人は嫌だと言うのでエリス嬢が向こうのチームに入った。これはヘイズには嬉しい誤算であろう、隠れて喜んでいた。

「ねえ、ヘイズはソフィーナが好きなんですよ。ヒューズに遠慮してていいの？」

「ヒューズと俺は親友さ！ 恋も正々堂々といくよ。今回は順番を決めたんだ、お互い足の引っ張り合いはしない。」

言っていることは力ツコいいんだけど、顔は悔しがっている。そんなとき、獲物が見えた。

「鹿だ…。」

ラルゴ（小鳥）が肩から降りると、静かにヘイズが弓を構え矢を放

つ。かきん、と角で弾かれた。

「下がつて！モンスターです！」

護衛の2人が前に出るが、素早く近寄つて来たモンスターに1人が弾き飛ばされた。

（あれつてこのあたりで一番ヤバイつていつてた一角鹿だ！）

自分も前に…ラルゴは…何に変身しようか悩んだ。

ラルゴの初クエスト（10）

一角鹿はこの辺りにときどき出現するモンスターで当然鹿ではない。鹿のふりをして近づき獲物を狩る。その角が強力な武器だと聞いていたが…。

護衛の人が、相手をしているが苦戦している。モンスターの角に触れただけで剣が大きく弾かれる。角からは変な音が響いてくる。

「ヘイズ、マリアを連れて逃げろ！」

変身を解いてヘイズをかばう様に立つた。まず依頼人の安全を優先するべきだろう、いきなり現れたラルゴにマリアが驚いた声をあげた。

「嫌だ！俺の方がお前より強いんだぞ！」

確かに剣技ではヘイズの方が上だ。ヘイズは剣を抜きモンスターに向かつて走り出した。

「待つて！」

ラルゴは犬に変身しあとを追いかけた。一角鹿は新しい相手に目を向け、…その角をヘイズに向けた。

（させないぜ！）

ラルゴはヘイズを追い抜き一角鹿の側面に回り込む。一角鹿はその動きを嫌つて大きく横にステップして距離をとつた。対峙していた護衛と、ヘイズが並んで剣を構える。先ほど吹き飛ばされた人もなんとか立ち上がり参戦する。3人でモンスターを包囲した様なかたちになる。だが、角が危なくて迂闊に近寄れない。

ラルゴは小鳥になつて角が届かない高さを旋回し、気を引く。
（どうやって攻撃する！小鳥じゃなんにも出来ない…）

あの角の様に強力な武器があれば、と思つて角を見たとき…角の周りに何かが見えた。

（あれは…風？）

一角鹿の角を中心に風が渦を巻いている。それが分かる。

（そりゃー今俺は鳥だから風が見えるんだー！）

見えると言つ表現はおかしいかもしれない、感じるといつべきか、でも確かにそれが見える。

ラルゴは一角鹿に突つ込んだ。一角鹿は角で迎え撃つが風が見えるラルゴには動きが丸見えだつた。逆に角の周りの風に乗り顔に近づく。

チクチク！

クチバシで目をつつく、痛がつてモンスターは片目をつむる。

「いまだ！」

死角にいたヘイズが剣を構え突撃するーが、一角鹿は氣付いて角を向けた。

（やばい！）

ラルゴはヘイズが串刺しになるのを想像してしまつたが、そのとき土の中から黒い手がのびてモンスターの首を掴んで組み伏した。

「ひゃあべつ！」

ヘイズはその動きについていけず、モンスターの体につまずいて転んだ。

地面ではゴリラがモンスターの首を閉めていた、つと思つたらライオンに変身して首を噛んだ…それで戦いは終わつた。

変身を解いたルーク師匠が笑つてこちらを向いたが、…ちょっと怖かつた…。

ラルゴの初クエスト（1-1）（前書き）

いつも感謝・感謝です。

ラルゴの初クエスト（1-1）

「ふいー。」

ロロナト村に戻ったラルゴはルーク師匠と宿の大風呂に入っていた。
「サッパリするなー、風呂最高！」

モンスターと戦ったときに土まみれになつたルーク師匠は、風呂に入る前に念入りに体を洗う。共同浴場は皆のために身体を先に洗うのがマナーだ。

「師匠！質問です、どうやってモンスターに近づいたんですか？」

「もういいですね。」

あの後、マリアベル嬢が怪我をした護衛の人を手当てをして怪我を悪化させたり、マリアベル嬢にヘイズと一緒にあなた達の辞書には勇気と無謀が同じ意味で載つているの！と説教されていたたり、マリアベル嬢にアビリティを隠していた罰と言つて猫に変身を強制させられてハグられて気絶しそうになつたり、マリアベル嬢に他女の子にも吹聴されてハグられて気絶しそう（2回追加）になつたり、大変だつた…チョット役得と思つたのは秘密。

「モグラだよ。アレはモグラ、ゴリラ、ライオンの連続変身だ。^{コンボチェンジ}」「すごかつた！俺、感動でした。」

ルーク師匠は笑いながら、

「…お前だつてできるようになるぞ、それより”風”をつかんだようだな。」

そのことを気付いていた師匠にまた驚いた。

「鳥の変身練習の本当の目的つて、もしかして？」

「そうだ、鳥にうまく変身するためもあつたが、鳥の”力”を理解することが目的だつたんだよ。動物にはたくさんの種類の分だけ、たくさんの力がある。アニマルチエンジはそれを使いこなして初めて…楽しめる。」

ラルゴはルーク師匠の言葉を噛みしめる…、

（俺、戦う力ばかり欲しがっていた…だからルーク師匠は身近なところにいる、あまり大きな力のない鳥を選んだのか。まだまだ俺は…）

ケインならラルゴの欲しがっていた力を欲しがつたかな、などと思つていると、

「それから、貴族の『令嬢達がここに来たことは黙つてろ。』

「なぜですか？」

「トラブルの元だからだ。俺の経験上、貴族の女性と関わるとろくなことがない。」

ものすぐ同意です…師匠。

ラルバの初クエスト（1-1）（後書き）

次のお話でやっと題名とリンクする予定です。

紋様術（一）（前書き）

今回の話では、よつやく紋様術について掘り下げる予定です。

ケインとラルゴは全力で走っていた。ララカルの街中心部の街並みは、流石に観光地でもあるので整っている。

「アビリティ発動！」

全力疾走するラルゴ（犬）には普通では追いつかない、”^{ブースト}身体強化”により加速される。追いつく、と思ったらラルゴ（犬）は犬ならともかく人間では通りづらい建物の隙間を通られ、また見失う。行き先はわかっているので出現ポイントを予測して移動すると、大通りで発見した。後を追うが目的地点にさきに到着されてしまった。

「…ゼーゼー、また、負けたあ！」

「…ゼー、へへ、じゃ、荷物、出してくれよ、ケイン。」

預かっていた荷物に異常がないことを確認してからラルゴに渡す。

「（ロンロン）お届け物、です。」

目的地点、つまりある家の玄関で、受け渡しの言葉を交わして受領書をラルゴが受け取る。

「「有難うございました！」」

2人でお礼をいって帰りはジョギングのスピードで帰る。

「アレはズルだろ！」

「ふふ、勝利の女神は俺の方が好きなのさ」

「ゼンゼン意味不明！」

2人で会話をしながら帰れるよつになつたので特訓の成果が出て来てはいるのだろう。

自分たちに”遅咲きのすずらん亭”の先輩達は特訓を命じて來た。

”配達のクエストで体力強化！”である。ただし、鬼ごっこで、負けると（ここでは到着までに捕まえられないか、捕まつた場合）恐ろしいペナルティが待つてゐる。受領書は勝利者の証しだ。もちろん品物を壊したりしたら弁償プラス二人ともペナルティだ。何件かの配達が終わつてからパーティーハウスに帰り、鉛板を仕込

んだ服を脱いで水を浴びて汗を流す。この前まではサララさんお手製の”砂の服”を着せられていたが、砂が縫い目から出て来て非常に着心地がわるかつたのでクレームを付け絶版にしてもらつたら代わりにと渡された、夜なべまでしたらしい。

サッパリしたところでパーティーハウスの共有フロアに入るべく扉を開け…閉めた。

「ラルゴ、逃げるぞ…！」

「どした？」

「蜃氣楼がいる、それに見てはならない契約の場面を見てし、ぼへえ！」

扉が勢いよく開けられ吹き飛ぶ。

「待つてたのよ はやく。」

笑顔のサララさんが2人を招き入れる。

「目の錯覚から蜃氣楼になつたか…どうやら本気で私の治療を受けたいらしいな…、第一蜃氣楼が”いる”では言葉的に致命傷だ。」王都に帰つたはずの紋様術師のタチアナ師匠がそこにいた。服装は、またもやアルパカ40ナインの制服であつた。

「お茶目なジヨークですよ。それよりその格好は？それとさつきの重そうな巾着袋はなんですか。サララさん！もう受け取つてましたよね今、師匠から。」

やな予感しかしながら聞かないわけにもいかない。

「そうよ、ハウスエストよ。2人をご指名でね」

ラルゴと顔を見合せた。

「ケイン今度は…逃走の掛け声は扉開ける前にしろよ。」

それは無理だろと思いながらも、自分もそうしたかったと思つケインであつた…。

紋様術（2）（前書き）

いつも読んで頂き、感謝・感謝です。

紋様術（2）

タチアナ師匠の話、クエストの内容はそれ程悪いものではなかつた。「…」非自然体への変化による禁忌抵触の状態に関する論文が非常に高い評価を受けてな、以前の地位に戻るまであともうすこしといつたところだ。」

この前のクエストで禁忌に触れたアビリティ持ちと出会つた。タチアナ師匠の力でその者は救われたのだが、師匠はこのことを論文として術師会に提出していた。

「実績が必要なのだ。ここでラルゴ、あるいはケインのアビリティを解析すれば一気に返り咲くのだが、…まず簡単にはいくまい。しかし、2人を絡めばうまくいかなくとも興味を引く事はできる。今回は絶対に失敗は許されない。堅い策でいく。」

そう語るタチアナ師匠の姿は、いつもより気合が入つてみえた。ケインは正直、その姿にドキリとしてしまう。元々超がつくような美人だ、さらにアルパカ40ナイツの制服があり得ないほどにあって見える。

（この人にもこんな姿があるんだ…）

いつも冷静な言い回しを使つし、感情がないのではと思つときもあつた。しかし、今のタチアナ師匠は輝いてみえた。

「そこで、以前2人のテストに使つたダンジョンが復活したとの報告があつた。あそこは王都に近いし地下1階しかないから、扱いやすいし管理もしやすいという事で早速調査する事になつたようだ。しかし、GMは冒険者にとつて天敵だ。現れたばかりでもうしばらくあそこには現れないであろうが、わざわざ手を上げて依頼を受けれる冒険者はいない。」

「なるほどね、それで俺たちなんだ。」

ラルゴが納得といったふうに頷きながら言葉を挟んだ。

「…で、ケインどうする？」

「行く！聞くまでもないだる。いいですよサララさん。」

「そり、あそこのダンジョンはまだクリアしたわけではないのだから。
「もちろんよ。もつ、前金は受け取つたし。2つ目の依頼も頑張つ
てくれるのよ。」

「はい、頑張ります！なつケイン！」

「おうよ、どつちもどんといだ！」

「…説明はいらぬのか、…つまらぬのつ。」

タチアナ師匠の依頼が普通の依頼である確率は天文学的に低いんだ
から、…とケインは心中で答えた。

紋様術（2）（後書き）

この週末は、作品全体のメンテナンスをしていたり、次の展開を考えていたのであまり執筆は進みませんでした。先が気になる読者の方々、申し訳ありませんでした。

紋様術（3）（前書き）

読んでいただきて、感謝・感謝です。

コシコシと足音を立てて階段を降りると、冷んやりとした空気が頬に当たる。ケインは久しぶりのその感触に戻つて来た事を実感した。前に、このダンジョンに入つたときは冒険者になる前だつた。ひどく緊張していたのを覚えている。あのときはラルゴと2人であつたが、今回はラルゴとタチアナ師匠ともう一人、紋様術師のサイラスという男だ。金髪で碧眼、まさに絵に書いた様な美男子だがキザな言い回しを使い、ケインは苦手だと思った。

今回はこのダンジョンの制覇と共に2人のアビリティの解析作業が行われるのである。フーバー老師派からサイラスが派遣されラルゴを、リシェル老師派からタチアナ師匠が派遣されケインを、それぞれ解析する約束になつてゐる。つまり共同戦線を張つて解析作業を行つて行く事になつたのである。タチアナ師匠にサイラスの事を聞いたが、苦い顔で実力はあるが軟派な男だと言われた、何度も口説かれた事があるらしい。

4人でしばらく進むと曲り角があり、曲がるとペペットがいていきなり攻撃してきた。

置物の様な気配のなさに一瞬反応が遅れる。

がつん、と音がして攻撃が弾かれた。

「ペペットの相手はキミタチだろ、タチアナ怪我はないかい？」

サイラスがキザつたらしく言葉を紡いだ。

ケインはアビリティ”ブースト”を発動させてペペットの片足をつかみ振り回す、そのまま壁に叩きつけた。すかさずラルゴが頭を鉄棒で叩き割ると、動かなくなつた。

「ペペットの頭は価値がある、わざわざ潰さなくてもいいだろ？」

「よく喋る人だな……」少しウンザリしながらも礼を言つ。

「さつきは有難うござります。今のはサイラスさんですよね？」

「ちとやばかっただ。有難う！」

2人の礼を聞き、サイラスは当然だと言つばかりに頷いた。

「我が紋様陣にかかれば造作もない。」

サイラスの左手前腕の紋様が光っている。

「それっすか？」

ラルゴが珍しそうに聞く。

「無知だな、こんな事も知らないとは。」

「まだ新人だ、見た事がないのは仕方がなかろう。」

さすがに自分が師匠役として面倒を見たことのある2人に、タチアナ師匠がフォローをいれた。

「今のは左手に描いてある紋様の力で弾いたのだ。その紋様陣は常時発動型で任意の対象を自分の周りの空間に入れたり入れなかつたりができる、一般に”結界”などと言われる力だ。」

タチアナ師匠の説明は流石に専門家らしくわかりやすかつた。タチアナ師匠の説明を要約すると…、

：紋様術師は長年のアビリティと印に対する研究で紋様それ自体が力を持つていてる事に気付く。そしてそれを発動するためにSCMが必要な事も発見した。今日までに多くの研究者の手によって、様々な紋様陣が発見されている。

しかし、一度何かに書かなければならぬ事、アビリティと違い獲得SCMによるので一度に使うことのできる紋様陣の発動回数は制限がある事、などの欠点もある。

「今後は2人とも、もつとゆっくり動いてくれないかな、アビリティ発動中の紋様が見づらい。」

サイラスの発言はムツとくるものがあつたが、これも代金のうちとケインはガマンして了承した。

ラルゴと目を合わすと、割に合わぬ、との意志が伝わってきた…ケインは全くだと思って肩をすくめた。

紋様術（3）（後書き）

SCMの説明は、<ララカルの街にて冒険者業に就職（2）>にあります。

紋様術（4）（前書き）

また、お気に入りしてくれる人がいました、嬉しいです。
みなさま本当に感謝・感謝です。

ダンジョンの天井の明かりは場所によって強弱が異なる。比較的明るいところで紋様のチェックを受けてから、しばらく進むとまたもやペペットに遭遇した。しかし、今度は発光しながら床から出でくる出現方法だつたので余裕があった。

（さつきだつて、構えていれば問題なかつたのにな。）

そう思いながらもケインはラルゴと攻撃の打ち合わせをした。今度はラルゴが先行する。

ラルゴはアビリティ”アニマルチェンジ”を使い小鳥になつてペペットの上を旋回する。ペペットはうるさそうに見上げているが手を出さない、小鳥は攻撃対象には含まれないのだろう。ラルゴは後ろに回つたところで犬に変身し右手を噛んで引っ張つた。しかし、力比べではペペットの方がはるかに上の様でペペットが腕を降るとラルゴ（犬）は宙を舞つた。壁にぶつかるまえにまたもや小鳥に変身して足元に向かう。人間に戻つて鉄棒で踵をに一撃を加える。ペペットが大きくバランスを崩したところでケインが突入し頭を碎く。陶器の様に壊れた頭部の破片の中に、砕けたペペットの目を見てサイラスがまた何かをいつてきたが耳に入れなかつた。

戦闘のあとは毎回アビリティのチェックを受ける事になつている。今のラルゴの装備は武器の鉄棒を除くと、靴と短パンのみである。ケインも短パンと両手の堅手袋で指先から肘までをカバーしているのと、堅長靴で膝からしたをカバーしているのみである。結構恥ずかしい。

紋様の確認のためリュックは許可されず、荷物は両手に一つづつの袋を持ちその中にいれている。片方は自分のもの、もう片方はタチアナ師匠のものだ。ラルゴはサイラスの荷物を持っている。最初の攻撃に反応が遅れたのもそのためである。その後、ラルゴと打ち合わせをして交互にどちらかが荷物を多く持ち、片方は素早く対応で

きる様にする事にしている。

「ラルゴ、気を抜くなもつと紋様を光らせておけ。」

スケッチブックに何かを描きながら、サイラスの注文が飛ぶ。ラルゴのアニマルチェンジは変身した動物の方には紋様が浮かび上がりない、変身前と変身後にはそれが見えるので、今の消え掛かっている発光する紋様を消すなどしている様だ。

「う~コントロールできないんすけどねえ。」

ラルゴは困った様につぶやいた。

ケインの方もタチアナのチェックが入る。

（…こつちはこつちで変なポーズ取らされるからな。）

「フラフラするな！変なポーズなどと考えているのか？」

ケインは相変わらずこの人絶対に読心術のアビリティあると思った

…。

紋様術（5）

タチアナのチェック受けながらケインは疑問を投げかけた。

「そういえば師匠がスケッチしてるところ見た事ないですね。」

そう、今までにタチアナ師匠がスケッチしてたところは見た事がない。以前、ララカルの街ですずらん亭を担当してくれている紋様術師がラルゴは紋様を描いているのを見た事があつたが、かなり細かくスケッチ描写や文章記録をしていた。タチアナは少し間を置いて、「…人それぞれだ。スケッチするものも、文章で記録するもの、そして私の様にイメージとして頭の中に記録する者など、な。」

「最もイメージだけで記録できるのは、タチアナと私ぐらいのもんだ。最も今回は大事な報告書を書かなければならぬので私はスケッチをしている、念のためだよ。」

サイラスが勝手に会話に割り込んできた上に、最後の部分を強く強調された。実際はどうかわからないが、それができるのは紋様術師として稀有な存在らしい。

「…ふむ、それよりケイン、予定通りバトルスタイルを教えてくれ、変化がなさすぎて手がかりにならん。」

「了解です。」

「なら、ケイン”あつち”でやるのか？」

ラルゴの問いに、鉄棒を荷物の中にしまつ事で答えた。ラルゴのい

う”あつち”とは拳のことである。

ダンジョンを前に進むと足音が聞こえてきた、規則的で硬質な足音が。

そちらに気を取られると、

「ケイン！後ろ！」

ラルゴの警告に振り返る。

後ろでモンスター出現の発光現象が起きていた、しかも2つ。

「前任せた！」

そういうつて後方に移動する。すると2体の横で、さらにもう一つの発光現象が起きる。

「モンスターの発生率が上がっているのか。危なくなつたら下がれ。」

タチアナ師匠が叫ぶ。

（…キラキラ蟹のときの鉄は踏まない、ラルゴの方が片付くのを待つ、生き残ることを優先だ。臆病でいい。）

きつとサイラスに、みつともない戦いだつたと言われるであろう戦い方をケインは選択した…。

紋様術（6）

ケインは最初に発現した2体のペペットに向かう。アビリティ “ブースト（身体強化）” を使い一気に懷に飛び込みすり抜ける。

2体ともほぼ人間と同じ体型でケインよりは背が高い。振り向くと2体はこちらに、1体はタチアナ師匠の方へ向かった。

タチアナ師匠は攻撃的な紋様陣は用意していないといつていたが、サイラスのような防御の紋様を実装しているといつていた。なので大丈夫だと判断し意識からはずす。

（2体も同時に相手にするんだ、無駄な思考はいらない）

ケインはケン・ポーと呼ばれる戦闘術を教えてくれたハーティアの言葉を思い出しながら構えた。

（君は武器を使った戦闘に全くセンスがない、キレイサツバリ清々しいくらいに…）これを聞いたときは自覚があつたので傷ついた、ほつとけ…。

風を切つて振り下ろされる腕を次々とよける。

（だが、サララの鉄球を見事によけるあの動きは、そう、私に近いものを持つていると感じたんだ！だから君に教えようと思う。）これを聞いたとき、新聞は間に合つてます　社と1年は解約しないつて契約したので断ります、と言いそうになった…。

いきなり回し蹴りがきた、コマの様に連續回転して追尾してくる。ぐぐり抜けざま、軸足を引つ掛け転ばす。

（きつとこれを覚えれば私と同じ高みに登れる、そう、サララの鉄球から逃れられるんだ！）チョットだけ惹かれるものがあった、あの鉄球相手の訓練は正直命の危険が…

連續の振り下ろしを2体同時にしてきた…必死にかわす。

「田の前に敵がいるのにまかっとするな！馬鹿弟子！」

（…おっと、逆に余計なことばかり考えていた。イカン！仕切り直しだ！）

ケインはペペットの攻撃の合間をぬって独特の構えをとった！

そう、ケン・ポーの…。

紋様術（7）（前書き）

いつも感謝・感謝です。

紋様術(7)

ハーティア…すずらん亭隨一の実力者で”姿隠し”のアビリティ持ち…の言葉がよみがえる。

ケインはアビリティの発動を停止して前に歩を進める。

(…[冗談はこのぐらいにしてケン・ポーの真髄を伝えるますね、ケインあなたは無になりなさい)

ペペットの攻撃をかわす、かわす…

(無に攻撃が当たりますか?当たりませんね…)

かわす、かわす…

(紋様の光が目立ちますからアビリティは禁止。ケイン、無になりなさい。街での鬼ごっここの特訓もこのためです。)

かわす、かわす…

(”姿隠し”を持つ私だけが極めることのできたこの技は、あなたに何をもたらすのでしょうか。)

”姿隠し”をしながら人混みを通ったとしても決してぶつからない足さばき、体さばき…

(無が授ける有…)

かわす、かわす…

（かわす、かわす、かわす…、僕には当たらない、僕は無…）

かわしながら誘導する、2体のペペツトが1つに重なる位置に…

（無から有に…）

アビリティを発動して体当たりをかます！2体とも壁に激突した。

「きん、きんとラルゴの振るつ棍棒がペペツトの頭部を砕く。どうやうあちらを片付けてきたらしい。」

「助かったよ、マジやばかった！」

体が震えている、どうもいつもと違う筋肉を使つた様で、あちらこちら

プルプルしている。

「結構、1人でいけそうだつたじやん！」

「無理無理！」

「いや3体でもいけ…」

「2人とも整列！」

勝利に湧く2人に厳しい口調の声がかけられた。

「立つたまま動くな！スケッチがしづらい！」

「片足上げる、片手を地面につけ、上をみる…」

それぞれの担当の紋様術師が注文をつける。

「ハーダだよなこの仕事…」

ため息をつきながらラルゴがぼやく…。

ケインは頷きながら、ふと別のことと考えた。

（ハーティアさん実力は随一だけとサララさんには頭上がらないから、すずらん亭最強はサララさんだよな。）

変な格好でプルプルしながら…ケインはそんなことを考えていた。

紋様術（8）（前書き）

いつも感謝・感謝です。

「… も、… ダメ。ま、だ、で、す。か？」

ケインはあれから10分近く変なポーズを決めていた。

「仕方が無い、横になれ…止めるな！アビリティは発動させておけ！」

まだ、続くらしい。タチアナ師匠の真剣な目で自分の体を観察しているので、文句も言えない。

先にチェックが終わったラルゴが近づいてきた。サイラスさんもある。

「ケイン、いつの間にあんな技教えてもらつたんだ？」

「ハーティアさんは時々しか来れなかつたけどこの技は1月ほぼ毎晩特訓して。ラルは夜、ルークさんとどつかりつてたじやん。」

「まあ、俺の方も…ね。」

「ヤリと笑つたラルゴは魅力的で女の子ならどきりとしただらう。きつと何か夜用の変身でも練習していたに違いない。

「…もういいぞ、サイラス、すまぬが結界をはつてもうれるか？」

「君のためなら、なんでもするさ。」

そういうつてサイラスは地面に紋様を描く。タチアナ師匠は敷物を持つてその中に入り、座つて目を瞑る、何かをブツブツいつている。「イメージ固定のために瞑想に入つたようだ、1時間くらいはこのままだ。君達も休んでいるがいい。警戒は怠るなよ…」

2人背中合わせで座り、警戒しながら一休みする。

「サイラスさん！俺のアビリティ、何かわかりました？」

ラルゴがサイラスに問いかける。

「もう一つの方が何かはまだわからない。アニマルチエンジの印とそれ用の紋様が強すぎて、もう1つがよく印が見えないのだ。しかし、これからアニマルチエンジを授けてくれた神より下位の存在の印と推測できる。」

「神様に上下があるの？」

「神に上下があるかはわからないが、神に『えられたと思われるアビリティと精霊などに与えられたアビリティとでは力加減に差がある』と言わっている。まだ、実証例がないので推測ではあるが紋様術師の中では通説となっている。君たちは当然知らないと思うがね。」

「タチアナ師匠はあまりそんな事教えてくれないからなあ。」

「タチアナは不確実な事を伝える性格じやないよ…、研究者としては誠実だからね。それより、ケイン、君は本当に紋様術師泣かせだね。」

「そうなんですか？」

「タチアナは言わないだろう、そんなこと。実際私もこれ程厄介な印は見た事がない。一見ただのブーストの印のようだが、ライントレースが脈動する上に、微妙に変化する。おそらく、これを解析できるのはタチアナくらいだね。よく、アビリティの安定化が成功したもんだ。」

「…やっぱり。僕の描いたのタチアナさんだつたんだ。」

以前、ララカルの街で紋様をリライトしてくれた紋様術士があつてくれなくなつたのでそなじやないかとおもつていた。

ケインは瞑想が終わつたらその事を聞こうとおもつた。

紋様術（9）（前書き）

いつも読んでいただきて感謝・感謝です。

サイラスさんは、話してみると、さすがに、じつかり答えてくれた。自己主張が強い、そのことを認識してさえいれば結構付き合いやすいかもしない。ケインは自分のサイラスさんへの苦手意識がなくなっていることに気がついた。第一印象は当てにならないものだ。

（僕、人を見る目はまだまだよなー）

そんなことを考えながら3人で話をしていると、急にタチアナ師匠が立ち上がった。思つたより早い。

「ケイン、メンテナンスをするぞ、防具を外せ。」

「えつ、ここでですか？」

「すぐ済む、サイラス！ チョット……」

サイラスさんを呼び寄せて耳元で囁さそ話を。

「なつ！ ……本当か？」

「…あくまで理論上の話しだ。」

「ラルゴ！ 至急帰るぞ！」

「えへ、ケインたちは？」

そう、今日だけでダンジョンを攻略する必要はないので一緒に変えればいいのだ。

「ケインにはメンテナンス後、一戦してもらいたいのだ。こちらもすぐ帰るから先に行つておれ。」

「では、タチアナ先にいかせてもらひつ。」

「結果は知らせてくれ。」

「もちろんだ、さあ、ラルゴ！ 何をグズグズしている。」

「あつ、出口方向にペベットが！」

「どけ！」

サイラスが左手を振ると、ペベットが粉々に砕けた。

サイラスは居ても立つても居られない様子でラルゴの手を引っ張

つていった、あつという間に。

「あれ？ ナー？」

「衝撃波の紋様陣を実装しているらしいな。あれは高レベルの紋様陣だ。それより、早く横になれ！」

タチアナ師匠は袋に入っていた道具を全て取り出して並べた。

「…まさかとは思うけど、上書き（ライト）？」

「せっかくサイラスを追い払ったのだ。しかもここなら誰にも見られないことはない。」

タチアナ師匠の顔には今まで見たことの無いような、満面の笑みが浮かんでいた。

（師匠、本当に綺麗…、でも僕、ピンチな予感がする。）

ケインは自分の悪い予感の的中率の高さを恨めしく感じていた。

紋様術（10）（前書き）

今朝はログイン出来なくてアップできませんでした。申し訳ありません。

せん。

そして、祝！PV1万突破！

感謝・感謝の気持ちが止まりません！ありがとうございます！

紋様を描くタチアナ師匠は本当に綺麗だと思つ。ケインは床に寝転がつて紋様を描かれている間、そんなことを考えていた。

（一生懸命な人って惹かれるんだよね…）

以前より、タチアナ師匠は紋様を描くとき嬉しさが表情に現れるようになつていて。おそらく、一度紋様術師としての仕事を取り上げられたため、紋様を描くことの喜びを再確認したためではと思う。

「ケインよ、一つ問う。お前にとつてアビリティとはなんだ？」

「…いきなりですね。」

「私は紋様術に人生をかける。お前はどうんなんだ？アビリティはお前にとつて人生をかけるだけのものか？」

しばしの時間をおいてから答えた。

「…僕、アビリティが嫌いでした。一部の人にはしか「えられない神の恩恵なんて不公平だつて。なんで、…父さんを助けるために僕にくれないんだつて。それで、そんなことを考える自分自身が一番嫌いでした。」

言葉がまとまらない、と感じつつも言葉はとまらない。

「僕、強さが欲しかつたんです。他の誰かに『えられたものではなく、自分自身のちからでの強さが…。でも、アビリティを使えるようになつて、ともかく先ずはそれで強くなろうつてもつて、でもハーティアさん達にはまだ全然かなう気がしなくつて、でも持つてない人より強くなつてること得意になつたり、…『めんなさい。うまく言えません、僕の持つているアビリティのことなのに。』

「それだけで十分だ、今は。」

タチアナ師匠の顔は見えなかつたが、声は喜んでいるような気がした。

「さて、もうすぐ終わる、新しい紋様の力をギャラリーに見せてあげる。」

周りに集まっているペペット達をギャラリーに見るのは師匠だけ
だと思ひケインであった。

紋様術（1-1）（前書き）

pv1万突破を記念して感謝・感謝の感謝祭を行いたいと思します！この作品の王都の名前を募集します。

一番作品の雰囲気についたものを採用させていただきます。一応語尾に作者の考えた2文字くらい追記させていただく所存です。締め切り、11月6日零時までとさせていただきます。こんなことしていいのかな？

タチアナ師匠から新しい紋様のレクチャーを受けてからペベット達と対峙した。

すでに慣れてきた相手なので、かもしれないが、

「あまだな…、しかし負荷が小さすぎたか？」

「ゼー、ゼー、5体同時で負荷小さいつてどんだけ？」

タチアナ師匠に答えると、そのまま床に伸びてしまう。酷使に耐えきれず、身体がフルフルを通り越してガタガタしている。

「よくぞ説明だけで使いこなせたものだ。やはり部分制御はお前に相性がいいようだ。」

タチアナ師匠のレクチャーによると、ブーストの力の一部だけを強化（？）する紋様追記をしたのだという。

「強くなる”ために紋様を描くのではない。紋様の主要な機能は、授かった力を”拘束”することだ。制御出来ないアビリティは暴走することさえあり得る。紋様を描くことでそれを制御し安定化を促す、その結果行えることが多くなるので、”強く”なることができるので。今回は、身体強化の戒めを”俊敏性”と”耐久性”のみ緩めたわけだ。飛躍的にスピードがアップしただろう？」

確かにお陰で、相手にまともな攻撃をさせずに撃破できた。身体はボロボロだが。

「まあ、今日はこのくらいで許してやろう。帰るぞ。」

タチアナは、どじやのいじめっ子のようなセリフを吐いて帰り支度を始める。

「はーい、あつサイラスさんには何をいつたんですか？」

「ラルゴのもう一つのアビリティ解析のヒントをな。」

「やつぱり！ 師匠はもうわかつたんですか？ ラルのアビリティ。」

「あ、サイラスの結果を…。」

出口方向に歩き出したところ、2人の足元に変な紋様陣らしきもの

が浮かんだ。

「いかん！トライ」

師匠の叫びが中断されるのを聞きながらケインの意識は途切れた……。

紋様術（1-2）（前書き）

読んで頂いていつも感謝・感謝です。

紋様術（1-2）

ボッチャーン？

ケインは盛大に水しぶきを上げて着水した。

（どこ？）

今までダンジョンにいたはずなのに、明るい外に出たため、目が痛い。どうも池かなにかに転移させられたようだ。まわりは木々に囲まれている。

（タチアナ師匠は？）

見回すが姿が見えない。

（どうする？ そうだ！）

ケインはアビリティを発動させてジャンプする。まわりの景色が目に入つてくる。ここは林の中にある小さな池のようだ。

（あそこ！ 見覚えがある。ダンジョンの近くだ、… あつ？）

池のなかに、見覚えのあるキラキラしたものが見える。タチアナ師匠が着ていたキラキラ貝で装飾されたアルパカ40ナイツの衣装のようだ。着水してそちらに向かおうとする。その途端、水が盛り上がり池の外まで吹き飛ばされた。

（モンスター？ 急がないと師匠が溺れちゃうー）

ケインが構えると、3体の人型が浮かび上がってきた。

（…ええと、師匠？）

その三人は、金と銀と普通のキラキラ貝で装飾された衣装を着たタチアナ師匠だった。

紋様術（1-3）（前書き）

いつも感謝・感謝です。

この回で終わらせておいたり、ものすごくへ郷へなつてしまいまし
た。すいません。

3人のタチアナ師匠に対峙して、ケインは悩んでいた。向かって左のタチアナ師匠は金のキラキラ貝の衣装をきている、真ん中が銀、右が普通の衣装だ。

（ダンジョンのトラップに引っかかったみたいだけど、これは？）
今いる池はダンジョンと何か関係を持っているのか？何にせよ、先ほど吹き飛ばされたことと、3人の師匠の姿を見る限りこれから先ろくな事が起こらないだろうと予測した。

（また、悪い予感が当たつたっぽい。）

それでも池の中に三歩程はいって様子を見る。すると、

「何時に問う。汝が落としたのは金のキラキラ貝の衣装の女性か？銀のキラキラ貝の衣装の女性か？それとも普通のキラキラ貝の衣装の女性か？」

3人の口が動いて同じ事を同時に語り出した。

「…質問していいですか？それに答えればタチアナ師匠を無事返してもらえるんですか？」

「その質問には答えぬ。」

「では別の質問。本物はこの3人の中にはいるんですか？それ以前に生きているんですか？そうじゃなきゃ答える意味がない。」

「…本物はこの中にいるし、間違いなく生きている。」

「ありがとうございます！」安安心しました。本当に本当にありがとうございます！」

ケインはホッとした様子で胸をなでおろしていると、

「そんな、…お礼を言われると照れますね。」

（ここは強引にでも話をとしてヒントを…）

ケインは会話を続けた。

「いえいえ、貴方のお陰でタチアナ師匠が助かつたんです。お礼を

言つるのは弟子として当然のことです。」

「池に落ちてきて、混乱しているところを捉えたのだ。助けたわけではない。」

「師匠は以前、泳げないつていつてました。だからですよ。本当にありがとうございます！」

大嘘である。

「…まあ結果的だ。それよ…」

「本当に素敵な方ですね貴方は！相当高貴な存在とお見受けします、神様ですか？」

「そんな、神様だなんて？、まだ成り立ての新人GMですか。」

「なんとGMでしたか？それで姿は見えませんがお声だけでも神々しさが伺えます。…かなり将来を期待されているんでしょうね。」

「そんな？ようやく神に準ずる存在になれたのよ、今回のプレイで頑張つて神様達にいいところを見せればさらに上を…ああうつ私つておしゃべり！」

「大丈夫です、貴方様のために誰にも話しませんから。」

「お願ひね？」

GMはダンジョンなどに出現する冒険者泣かせの存在である。その存在も、与えて来る試練の意味も不明な事が多い。が、今回はどうやらこのGMの試練を神様が観覧されているようである。

（命がけの劇をやらされているみたいだつてなにかの記事に載つてたけど、本当にそれっぽい。）

ケインは必死で言葉をつなげて情報を少しでも得ようと思ったのだが、…色々な情報が手に入つた。しかし、肝心のタチアナ師匠を救う情報がまだない。

「じゃあ、1つだけヒントをあげるわね。3人のうち2人は水の精靈にお願いしてまったく一緒の姿をとつてもらつているの。外觀からも、触つてみても、本物と変わらないわ。」

（ありがたい！でも、…見ただけじゃわからないって事だよな。）普通のキラキラ貝の衣装のタチアナ師匠が本物に見えるが、見慣れている姿だからだろう。焦つて答えを出すわけにはいかない。

(まだ情報が足りない、もっと聞く気にならなくては。)

「ヒントまで頂けるなんて、本当にありがとうございます！貴方に会えて本当に光栄です。そういえば、以前あつた方も神々しいお姿でしたが貴方様も大層お美しいのでしょうか。」

「…マズイわー早く答えてー！」

卷之三

10秒以内に答える!! 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

(クッ、二つない」としゃべったか。)

外見で見分けがつかない以上、確率は3分の1。

かも……ああ、わからんない！

もつ、カンで答へるしかなこと思つて答へものとつたとれ

くべきます。

「ひよへあ」

3人のタチアナ師匠から奇声が上がつた。 いつの間にかケインの横に以前見た子供の婆のG.M.がいる。

1

「まつたく！」ケインくんいぜんしょうひんとしてあげたペペツト

「記念に添へ、」パリ

話急に家に：ハリテイリハヤスに置いてあります

急な展開に、ケインはついていけなくそうになりながらも必死で回答した。もつとも家にあるのはGMが関わっていたので誰も買い取つてもらえなかつただけであるが。

「じゃあ、そのしょうひんをかえしてもらいますね。そのかわりほんもののじょせいをかえしてあげましょ、ちなみにほんものはどうぞおもいました?」

「…金の衣装の師匠だと。」

「なぜ?」

「…一番綺麗だと思ったから、…衣装が師匠に似合っているから。子供の姿のGMは天使の様な笑みを浮かべると、

「これはもうひとつしょうひんをあげなければいけませんね」

左の金の衣装のタチアナ師匠が宙に浮きながらケインのところに来たのでお姫様抱っこした。衣装も元の色に戻る。銀の衣装のタチアナ師匠の姿をしたものは水となつて池に戻った。

普通の衣装の姿のものは、…ケインのところまでスヌックと水の上滑るようすに寄つて來た。

「しょうひんとしてこのあげるね」

「…あの、いつまでこの姿でいるのでしょうか?」

「ほんらいのしょぶんの…しょつめつのほうがいいのかな?」

「「めんなさい…消滅イヤ消滅イヤ消滅イヤ…」

「じゃあかえるね、ほんとにじりじりがたいへんなんだからかんしゃになさい。」

そういうとまた以前のよつに消えてしまつた。

「…えつと、さつきのGMさんでかなりスゴイの存在な。」

「は」、詳しことは言えませんが…うつう水の精靈にまで格下げされてしましました。」

「氣を落とさないで…つていつても無理かな?」

「本当にお優しいんですね、ご主人様?」

タチアナ師匠の格好で目を潤ませてそんなことを言われて…血の氣が引いた。

「…私の…姿で…そんなこと言わせるな…馬鹿弟子!」

少し弱つた声でタチアナ師匠が非難の声を上げる。

「意識が戻つたんですね、よかつた!」

「…意識はあつたからな。…最初から聞こえていたぞ、太鼓持ちめ。」

「必死だつたんですよ、師匠を助けるために。」

「…まあ、いいだらう、…よくやつた。」

ケインは安堵して、涙が出そうになつた。

「泣くな！…鬱陶しい。荷物を拾つて帰るぞ。」

そういうながらも、ケインの涙を拭ってくれたタチアナ師匠はいつもより優し顔をしていたような気がした。

「…はい。」

ケインは抱いているタチアナ師匠の温もりを感じて自分が生きていることを実感した。喜びが湧き上がつて來た。

（これが…僕の生きる道）

なんとなく、自分の人生の歩み方が見えたような気がしたケインであつた。

紋様術（1-3）（後書き）

サブタイトルの紋様術の掘り下げがイマイチでしたが、作者は楽しんだつもりです（笑）

元ネタは金の斧と銀の斧とのお話です。

水の精霊メイド（一）（前書き）

いつも読んでただいて感謝・感謝です。

水の精霊メイド（1）

GMと会つたそのあと、ケインは3人で宿に戻つた。なんとか日がくれる前に宿にたどり着きケインは自分の部屋に入つた。この宿でケインとラルゴは2人部屋、タチアナ師匠が1人部屋である。部屋にはいると手紙が置いてあつた。ラルゴからで今日は術師会館に泊ることになつたと書いてあつた。荷物をおいて、手紙だけもつてタチアナ師匠の部屋に向かう。

コンコンと扉を叩くと、タチアナ師匠が開けてくれた。こちらの部屋はゆつたりとしたスペースがあり机や椅子、ソファもある。隣室に繋がる扉があり2部屋の仕様となつていて。もう一部屋は師匠の荷物がたくさん置いてあるのを昨日見せてもらつた。

「…すまんが、楽な格好をさせてもらつ。」

そう言つてタチアナ師匠はソファに横になつた。まだ、疲れが取れていないらしい。

（ねえ、そろそろ出ていい？）

タチアナ師匠の荷物の中から声が響く。

「もういいぞ、出してやれ。」

荷物の中から水筒を取り出し蓋を開ける。中から水の精霊が出て來た。

「ケイン！目を閉じろ！」

慌ててタチアナ師匠が起きて来てケインを後ろ向きにする。なにやら「ゴソゴソしてから目を開けて振り向く許可が降りた。

「じ主人様？この格好はどうですか？」

そこにはフェイスタオルを巻いたタチアナ師匠（身長30cm）がいた、いや、師匠と瓜二つの人形のような水の精霊だ。

「…本当にそれ以外の姿になれるのか？」

「基本、この姿か水の姿でしかいられません。この姿で固定化されましたから。短時間なら他の人間の姿になれると思いますけど…。」

元GMの水の精靈はGMのルール違反を犯してしまったらしく、罰として高位のGMに水の精靈に格下げされ、化けていたタチアナ師匠の姿でケインに従うことを命令されたのだ。

「師匠、これからどうします?」

「ふむ、…まだ、ダンジョンの攻略が済んでいないし、アビリティの方も一定の成果をあげて報告しなければならない。しばらくはこれから動けないことになるな、さてどうしたものか。」

「この子のこと、報告します?」

「術師会から隠せるなら隠そうと思つ。GMに会つた事を知られると色々面倒な事になるからな。」

GMとの接触は歓迎されないらしく、紋様術師として復帰をかけたこの時期に会つた事が伝わるとマイナスらしい。この宿に入るのもどうしようか散々悩んだ挙句、水の姿に戻つてもらい水筒の中に入ることで事無きを得た。ただし、水筒に入らない分を捨てたためサイズが小さくなつてしまつた。

「ともかく、名前を決めていいですか?」

「…主はお前なのだろう?なぜ私に聞く。」

「変な名前だと、師匠が怒るでしょ。」

「あたりまえだ!」

「私はタチアナでいいですけど、ご主人様?」

「絶対やめろ!…もう疲れすぎて力が入らん。」

日中の身体を強制的に操られたため、かなり疲労しているのだが、別の要素が疲れを増幅しているらしい。

「今までの名は使えないから僕に決めて欲しいつて帰り道で聞いてから色々考えたんですけど、アリーでどうでしようか?」

「…悪くないが、理由は?」

「アビリティからとつたんです、師匠は紋様とかアビリティとか切れてもきれない関係だと思うから。」

「…まあいいぞ、では部屋に戻つてくれ。少し休みたい。」

「私の名前はアリーですか?気に入りました!ありがとうございます!」

す、ご主人様？」

「ケイン…」

「はい？」

「わかつているだらうな？」

物凄いプレッシャーが師匠から浴びせられる。久しぶりの絶対零度視線だ。

「…わかつてます。」

そう言つてアリーと自分の部屋に帰る。

「なにをわかつているんですか？」

アリーがそうきいてきたが「まかす事にした。

「ええと、アリー。この部屋はラルゴって言う僕の親友と借りているんだ。アリーはどこにいてもらおうかな。」

「そうですね、この姿でいるときは人間とほぼ同じ機能を持つてしますので寝るところを用意していただきたいです。あと、水の姿なら綺麗な入れ物を用意していただきたいのですが…。皮袋の水筒はあまり…。」

水の精霊にも色々好みがあるようだ。

「じゃあ一緒に買いに行こう。あつ水筒はしょうのとこりだ。どうしようか？」

「では水の姿で、ベルトの様に輪になつて腰にくつつきましょう。」

そう言つてアリーは姿を変えてケインにくつついて来た。

その日は遅かったので、買えるかどうか心配だったが、宿の人聞いてから空いている店に行つたので買つ事ができた。アリーは綺麗な陶器製の器が気に入つたようだが、ララカルの街に持つて帰るとしたら、割れてしまう可能性が高いので木の桶にした。

あと、携帯用に竹の水筒を買つて宿の部屋に戻る。頼んでおいた夕飯をたべてその日は休む事にした。

（お休みなさい、ご主人様？）

ケインは自分の呼び方を変えさせようとおもつた。

（このまま“ご主人様”だとタチアナ師匠とラルゴになに言われる

かわからぬよな。）

この夜、ケインはサイラスさんが2人の師匠を同時に口説いている
夢を見た…。

水の精霊メイド（2）（前書き）

いつも感謝・感謝です。

水の精霊メイド（2）

今回はタチアナが語ります。

（？）

軽い浮遊感に意識が覚醒して行く…、しかし、思ったより鮮明に思考が働かない。

（寝起きはいい方なのだが…）

どうやら抱きかかえられているようである。

昨日も馬鹿弟子に抱っこされた記憶がある。なんとか自分を抱きかかえている者をみると…自分だった、すぐに相手に検討がつく。

「気がつかれましたか、タチアナ師匠。」

自分と全く同じ容姿の者にそう言わると非常に抵抗感を感じる。「こちらもアリーと呼ぶのだから、私の方も呼び捨てでいい。」「ではそうさせてもらいますね。」

タチアナはベットまで運ばれ寝かされた…。昨日はどうやらあのままソファで寝てしまつたらしい。

「昨日は全身ずぶ濡れになりましたし、私が操つたせいで体力が落ちていたのでしょう。高熱で意識がなくなつていたようですね。人間でいう風邪という症状でしょう。」

「ケインは？」

「今、宿に身体に優しい食事を作つてもらえるようにお願いしに行っています。それからこの服は勝手に借りました。裸で介抱していてはご主人様の目の毒でしょうし（笑）。」

この者、性格が悪いと少し感じながらも着替えを手伝つもらつた。「身体を拭きますね。」

そう言つてアリーは手をタチアナの身体に添えた。そこから温かい水の幕が全身をくまなく包んだ。

（これは気持ちいい…風呂にらずだな。）

水の幕を作つてゐる間、アリーは一回り小さくなつていたが幕を戻すと元の大きさに戻つた。服を着ると、

「横になつてください。頭を冷やします。」

といつて手を額に当ててきた。冷たくひんやりしていて気持ちいい。

「助かる。」

素直に感謝の言葉が出た。

「…一つ確認したいのだが、…」

懸案を、…気を重くさせていたることを聞くことにした。

「なにもありませんでした。」の姿も先程水の姿から戻つたばかりですよ。」

人の悪い笑みを浮かべてこちらを見る。

（…やはり、性格悪い。）

タチアナは断定した。

水の精霊メイド（3）（前書き）

いつも読んでいただけで感謝・感謝です。

水の精霊メイド（3）

「ンンン、とタチアナ師匠の借りている部屋の扉をノックする。入るようになめる返事をきいてからケインは部屋に入った。

「師匠、大丈夫ですか？」

持ってきた食事をテーブルに置きながらケインは問う。

「アリーのおかげで随分良くなつた。心配をかけてすまん。」
思つたより師匠の顔色がいいのでホッとした。服も着替えたようだ。
「よかつた。これ消化にいい食事だそうです。もう少し冷めてから
たべてくださいって。」

そういうつてから、アリーに礼と食事の介助を頼む。

「お任せ下さい、ご主人様？」

そう言われたとき、タチアナ師匠がかなりイヤな顔をした。

「…えつとさ、この呼び方恥ずかしいから変えよう。」

「では、ケイン様？で。」

タチアナ師匠の顔色を伺つとやはり、良くない。

「よ、呼び捨てにしない？」

「それはできません！ではケイン君？で手を打ちましょう。」

「…しばらくそれでお願いします。」

タチアナ師匠が複雑な顔をしていたのだが、全く同じ顔で微笑みながら見つめているアリーと対比するとなんだか笑いたくなつてきた。

「…馬鹿弟子への処罰は回復してからにするとして、アリー、姿は固定でも大きさはかえられるのだろう？色は？」

「大きさはかえられますし、髪なら色をかえれますよ。」

そういうと、タチアナ師匠よりひとまわり小さくなつて、髪の色がケインと同じ灰色になつた。長さもショートカットになる。年齢がケインとそれほど変わらなく見える。

「コレでどうでしょ？ プチタチアナバージョンとでも言いましょうか。」

「命名しなくてもいい！だが、そうしていてもひつと私の心がだいぶ軽くなる。」

アリーは微笑みながら了承して、小さくなつた分、いらなくなつた水を窓から捨てる。

「そういえばアリー、GMって他の存在を変化させることができるの？アリーはGMから水の精靈に格下げされたつていたから。」
ぎもんにおもつていたことを問う…

「私は元々水の精靈なんですよ。長い年月のうちに知識と自我を得て、高位の存在へと昇格したんです。今は得た力と知識の、水の精靈を超える範囲を、使つことを禁止されただけです。されたのは姿の固定くらいです。」

ケインは他にもいくつか質問したが答えてもらえなかつた。禁止された知識のうちにはいるらしい。

「師匠、ラルゴの様子を見に行つてきたいんですが。いいですか？」
タチアナ師匠の了承が出たので、ケインは術師会館へと向かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6066x/>

冒険者の心得その1生きるべし！

2011年11月4日14時18分発行